

おわりに

私の思いつきから始まった本プロジェクトですが、多くの方々の協力のおかげでついに 100 人のインタビューを集めることが出来ました。

ここでは、インタビューを担当したプロジェクトのメンバーの感想を紹介したいと思います。お読みいただいたインタビューはどのような人によって行われたのか、その背景にはどのような思いがあったのかがよく分かるかと思います。編集の都合で全てのメンバーのものを掲載することが出来ませんでした。ぜひインタビューとあわせてご一読いただければ幸いです。

渡辺幸倫

마지막으로

저의 즉흥적인 생각으로 시작된 본 프로젝트이지만, 많은 분들의 도움으로 무사히 100명의 인터뷰를 모을수 있었습니다.

여기에서는 인터뷰를 담당한 프로젝트 멤버들의 감상을 소개하고자 합니다. 읽으신 인터뷰는 누가했으며, 그 배경에는 어떤 생각이 있었는지 알 수 있을거라 생각합니다. 편집 상의 문제로 전 멤버를 게재할 수는 없지만 인터뷰와 함께 읽어주시기 바랍니다.

와타나베 유키노리

日本という場所に生きる

ソン・ウォンソク (宣元錫)

100人の移住者には100のライフ・ヒストリーがある。この記録集に登場する100のストーリーの中には、学業、結婚、仕事など誰が聞いてもわかりやすい人生の節目で日本行きを決めた人もいれば、「外国に行ってみて良かった」のような一見無計画な「移動本能」に掻き立てられた人や「青春がもったいなくて」のような今流でいう「揺れる青春」が垣間みられる理由もある。だが、移動の動機や経緯がどうであれ、この100人に共通することは生まれ育った地を離れ、いま日本という場所(place)にいることだ。

場所を人を変える。気候と食べ物が変わって出会う人が変われば、人は変わる。いや、人は変わらない。多感な青春を過ごし成年になって移住した人はいくら年月がたっても心の奥深いところに居座っているものは変わらない。だから「母語」と「母文化」というのではないか。100人のストーリーには変わる自分と変わらない自分のせめぎ合いがある。

100人それぞれにとって、日本はどのような場所なのか。日々の日常は彼・彼女らにそれぞれ異なる日本を作り上げている。「韓国と変わらない日本」もあれば、「理解できない日本」もある。インタビューを進めるうちに一つ面白いことに気づいた。そもそも韓国から日本に移動したことを前提に始めた話なので仕方ないが、日本滞在歴の長短にかかわらず「韓国ではこうなのに」、「日本ではこうだけど」のように、韓国と日本、双方を対象化していた。移動は場所を対象化し客観化させる力があるのか。

記録集に登場する多くの韓国人は、進学や仕事のために東京や大阪に移動する普通の日本人のように、それぞれのライフ・ステージにおいて、日本という場所が選択肢の一つになってい

た。日本は大きな決心がなくても新しいことにチャレンジしやすい場所のようだ。近くて、言葉を取得しやすく、いつでも帰られるし、また戻れる。今いる場所は違っても日韓は一つの空間(space)になりつつある。しかし、「俺にとって韓国と日本の中に国境はない」、と豪語する人も枝分かれしたストーリーの逆戻しがたやすくはないのはわかっている。

ニューカマー・コリアンのライフ・ヒストリーを記録する今回のプロジェクトで、私は記録者(インタビュアー)でありながら、実はインタビューされる側にもなり得た一人であった。「なぜ日本に来ましたか」、「日本生活はどうですか」、「これからも日本で暮らしますか」。テーブルの向こうに座っている人に切り出すこうした質問は、そのまま自分に向けられる質問でもあった。社会科学の調査方法で調査者が被調査者に感情移入することは禁物だ。でも話が進むうちにあいづちを超え「介入」したくなる場面が何度もあり、自分を抑えなければならなかった。心の中では叫んでいた。「私もあなたと同じことで悩んでいますよ!」と。

일본이라는 장소에서 산다는 것

선원석

100명의 이주자에게는 100개의 라이프 히스토리가 있다. 이 기록집에 등장하는 100개의 라이프 히스토리 중에는 학업, 결혼, 일 등 누가 들어도 알기 쉬운 인생의 분기점에서 일본행을 정한 사람도 있지만, “외국에 가 보고 싶었다”와 같은 보기에 따라서는 계획 없이 “이동본능” 따라 움직인 사람이나, “청춘이 아까워서”와 같은 요즘식으로 말해 “흔들리는 청춘”을 느끼게 하는 이유도 있다. 그런데, 이동의 동기나 경위야 어찌됐건, 이 100명의 공통점은 태어나서 성장한 땅을 떠나 지금 일본

이라는 장소(place)에 있다는 것이다.

장소는 사람을 바꾼다. 기후와 음식이 바뀌고 만나는 사람이 달라지면 사람도 달라진다. 아니다, 사람은 바뀌지 않는다. 다감한 청춘시절을 보내고 성년이 되고 나서 이주한 사람은 아무리 세월이 지나도 마음속 깊은 곳에 자리잡고 있는 것은 바뀌지 않는다. 그래서 “모어(母語)” “모문화(母文化)”라고 하지 않는가. 100명의 스토리에는 변하는 자신과 변하지 않는 자신의 공방이 있다.

100명에게 일본은 어떤 장소일까. 매일의 일상은 각자에게 서로 다른 일본을 만들어 간다. “한국과 별반 다르지 않는 일본”이 있다면, “이해할 수 없는 일본”도 있다. 인터뷰를 진행하면서 한가지 재미있는 사실에 접할 수 있었다. 한국에서 일본으로 이동한 것을 전제로 시작한 이야기였기 때문에 어쩔 수 없지만, 일본 체류 기간과 무관하게 “한국은 이런데”, “일본에서는 이렇지만”과 같이 한국과 일본 쌍방을 상대화하고 있었다. 이동은 장소를 대상화해서 객관화시키는 힘이 있나 보다.

기록집에 등장하는 많은 한국인은 진학이나 취업 때문에 도쿄나 오오사카로 이동하는 보통의 일본인과 같이, 각자의 라이프 스테이지에서 일본이라는 장소가 선택지의 하나가 되고 있다. 일본은 큰 결심 없이도 새로운 것도 도전하기 쉬운 장소인 듯 하다. 가깝고, 언어를 배우기 쉽고, 언제든지 돌아갈 수 있으며, 돌아올 수 있는 곳. 지금 서 있는 장소는 달라도 한국과 일본은 하나의 공간(space)이 되어가고 있다. 그러나 “나한테 한국과 일본 사이에 국경은 없다”며 호언하는 사람도 이미 가지쳐 뻗어간 스토리를 되돌리기 어렵다는 것은 알고 있다.

뉴 커머 코리아인의 라이프 스토리를 기록하는 이번 프로젝트에서 나는 기록자였지만, 실은 인터뷰를 받는 쪽이 될 수도 있는 사람이었다. “왜 일본에 오셨어요?”, “일본생활은

어떠세요?”, “앞으로도 일본에서 사실 생각이세요?”. 테이블 저쪽에 앉아있는 사람에게 던지는 이런 질문은, 그대로 내 자신을 향한 질문이기도 했다. 사회과학의 조사방법에서 조사자의 감정이입은 금물이다. 하지만 이야기가 진행되면서 꼬덕거림을 넘어서 “개입”하고 싶은 자신을 누르지 않으면 안 되었다. 마음속에서는 “나도 당신과 같은 것을 고민하고 있어요” 라고 부르짖고 있었다.

トランスナショナルな生活圏を生きる

武田里子

1. 「近くて遠い国」

羽田空港から金浦空港までのフライト時間は2時間半。これは新幹線で東京から盛岡、あるいは大阪へ行くのと同じ程度の時間だ。しかし、最近まで日本と韓国は「近くて遠い国」と表現されることが多かった。一つは、日本による朝鮮の植民地支配と日本に残った朝鮮人に対する差別的処遇に起因し、もう一つは、韓国での反日教育の影響もある。加えて、両国の一般市民が会う機会が限られる中で、否定的なイメージが増幅してしまった面もある。韓国で民主化宣言がなされたのは1987年、海外渡航が完全に自由化されたのは1989年のことだ。

ニューカマー韓国人と日本人との接触機会が増えたこの20年間は、冷戦の終焉に伴うグローバル化が本格化していく時期と重なる。何が変わり、何が変わらずにいるのか。ニューカマー韓国人の語りに耳を傾けることを通じて、「近くて遠い国」から「近くてかけがえのない国」になるための何か手掛かりがつかめるのではないか。そんな漠然とした期待感からこのプロジェクトに参加することになった。私は、新潟県南部で暮らす結婚移住女性の適応過程と農村社会の変容に関する調査を行ってきた。80年代後

半に来日した結婚移住女性には韓国人が多い。民主化宣言を待ち切れずに結婚というチャンネルを使って韓国を飛び出してきた女性たちと、都市部のニューカマー韓国人には、どのような異同があるのか。100 人ものライフストーリーに出会えるまたとない機会に心が騒いだ。

国連の統計によれば、2010 年の国外移民の数は 2 億 1400 万人で人口の約 3%。数の上では 1965 年の 7500 万人から 3 倍に増えたが、人口も増加したので割合は 2.3%からのわずかな伸びに留まっている。「移民の時代」と言われるものの、人が国境を越えて移動することは、今もそれほど容易ではないのだ。その限られた越境機会をつかみ取った人々のライフストーリーは、変化しつつある現実と、その先の向かうべき方向性の手がかりを示してくれるに違いない。

ワンショット・インタビューの限界はあると思うが、インタビューイの協力により貴重なライフストーリー集を編むことができたことに、まず感謝したい。100 人のライフストーリーを読み込むと、移住者たちが日本と韓国を一体のトランスナショナルな生活圏として生きる姿が浮かび上がる。本格的な分析作業はこれからになるが、現段階で感じていることを予備的にまとめることで私の感想としたい。

2. 20 年間の劇的な変化

多くのインタビューイが韓流ブーム以降、「韓国人であることの意味が変わった」と語った。私はそれと同じ言葉を農村で暮らす韓国女性たちからも聞いていた。韓流ブーム以降、高校や公民館で韓国語を教えるようになった女性たちは、「20 年前には日本人が韓国語を習いたがるなんて想像できなかった」と言う。民主化直前に 26 歳で結婚来日した女性は、「もう少し我慢できたら、私の人生はまったく違ったものになっただろう」と話してくれた。「その時」を待つことができなかつたのは、軍事独裁体制

と儒教的価値観の下での生きにくさゆえであった。当時の韓国社会には、結婚適齢期を越えた女性や離婚した女性たちが、自分らしく生きられるスペースは限られていた。

韓国は、1996 年に OECD に加盟した直後にアジア通貨危機に巻き込まれ、2001 年まで IMF 管理下に置かれた。同じ時期に段階的な日本文化の開放が始まった。韓国政府は、日本の大衆文化禁圧政策について、「韓国国民の感情が日本の植民地支配によって傷つけられたままで完全に癒えておらず、この状態で日本文化の無制限な流入を許すことは韓国国民の感情を乱す」と説明してきた。日本文化の開放は、こうした対日感情を凌駕するほどの日韓の経済的補完関係の深化を象徴する出来事であった。

すでに 90 年代生れの世代が、留学生として来日し始めている。この世代はもの心ついた頃から日本のアニメに親しみ、中学・高校の第 2 外国語で日本語を選択し、それが日本留学への導線になっている。とはいえ、韓流ブーム後に来日した留学生も、先輩たちからそれ以前の日本での厳しい体験を聞き、社会見学として日本の植民地下で使われた刑務所跡などを訪れて、日韓の歴史について学んでいることを知って欲しいと言う人がいた。韓国の若者の多くは、日本人との関係づくりのために、歴史や政治の話題を避けている。同世代の日本の若者には、会話が成立するだけの日韓の歴史についての知識がないとも感じている。韓流ブームを表層的な交流にとどめず、歴史問題を乗り越える対話の機会につながりには、どちらかと言えば、日本の側により大きな改善の余地がありそうだ。

3. マイノリティの権利

100 人のライフストーリーを読み込んでいくと、彼ら／彼女らは、「今、日本に住んでいる」のであり、「移民」というよりも「移住者」の方が適切な表現だと気づく。そもそも「人はな

ぜ移動するのか」。この問いに、ガッサン・ハージ (2007) は存在論的移動性という概念を提示している。ハージによれば、人は「うまくいっている」と感じる限りそこに留まる。ところが、「どこにも行き場がない」、あるいは「ゆっくりしか進まない」と感じるとき、物理的移動を試みる。つまり、人は物理的に移動する前に、存在論的自己にとって、他の物理的空間の方によりよい可能性があると感じられるとき、移動するというのだ。ニューカマー韓国人にとっても、日本は必ずしも最終移住地ではない。子育てや就労などさまざまな条件に制約を受けつつも、「うまくいっていない」と感じるようになれば、再び移動を試みる。だからこそ、移住者は移住後も出身地との密接な関係を維持する。これが複数の帰属や複数のアイデンティティ、多元的な存在のあり様についての議論が注目される理由だ。

韓国と日本を一体の生活圏として暮らすニューカマー韓国人も、もちろん両国の出入国管理制度や国籍法などの制約を受ける。とりわけ、国際結婚者の場合には、家族が法によって引き離される可能性があることは重要だ。夫婦がお互いに相手国の永住権を取得することが、現段階では日韓を一体的生活圏として暮らす上で基本的な身分保障となる。また、日本で子育てをする移住者家族は、「日本人ほど日本語はできないし、韓国人のように韓国語はできない子ども」や「韓国人でも日本人でもない子ども」をありのままに受け止めて、「ナニジンかは関係ない」と納得しようとしている。「人種は韓国人で国籍は日本人」と整理づけて、家族全員で日本国籍を取得した人もいた。移住者には、国家領域によって切り取られない新たな居住権が必要になっているのかもしれない。

移民＝移住者は受入国ではマイノリティである。マイノリティの権利宣言 (1993年) 第2条5項には、「マイノリティに属する人々は……

民族・文化・宗教・言語的なつながりをもつ他国市民との国境を越えた自由で平和な交流をなんらの差別も受けずに確立し、維持する権利を有する」とある。古谷哲 (2010) は、ここから「国境を越えた、出身地との交通の権利」、つまり、出身地と居住地を自由に往来する権利を導き出せるのではないかと主張している。一考に値する。

子どものいる移住者が共通して語ったのは、子どもの教育と文化継承の課題だった。子どもが民族文化や言語を継承する権利を実現するには、集団的な場が不可欠である。文化は集団の中で形成され継承されるためだ。ニューカマー韓国人の語りからは、韓国学校と教会活動が重要な役割を担っていることが分かった。しかし、韓国学校で子どもを学ばせるには経済的な裏付けがなければならない。教会活動も信仰との関係があり一般化することは難しい。また、こうした機関を利用できるのは、一定数の韓国人が集住している新宿という特別な地域であるからにはほかならない。どこに暮らしているかにかかわらず、どのようにしたら子どもの民族文化や言語を継承する権利を保障することができるのか。難しい問題だが、日本でもマイノリティの権利という視点から移住者の人権について考えることが、今後、ますます重要になってくるだろう。

4. 「圧縮された近代」

「圧縮された近代」とは、近代化と脱近代化が同時進行している状況を表す。この表現は、現在の韓国をとらえるキーワードの一つだ。韓国社会の急激な変化をけん引したのは、何と言っても「漢江の奇跡」と呼ばれた急速な経済成長だ。そして、その影響が端的に現れた現象が少子化である。1970年には4.5を若干上回っていた合計特殊出生率は、1980年代前半に人口置換水準2.0を下回り、2005年には1.08と世界

最低を記録した。政府は「低出産および高齢社会基本法」を制定して対策を始めたが、2010年の出生率は1.23。依然としてOECD諸国で最も低い状況にある。一方、目覚ましい経済発展に比べて、韓国で社会保障制度が整ったのは通貨危機以降だ。経済発展速度と福祉制度の整備、個人化の進展と家族規範の変容などとの間に生じるギャップも「圧縮された近代」の一面といえる。

激しい受験競争を経て有能なグローバル人材となり、企業経営者として、あるいは安定的就労者として働くインタビューイも、韓国にいる親の介護や老後への懸念を抱えている。いずれ「帰国する」か、「両親を呼び寄せたい」という人もいた。しかし、現行の日本の入管制度の下では親の呼び寄せは短期滞在を繰り返すし、介護が必要になった親を日本で世話することは難しい。

日本と韓国は相似形だと受け止めるインタビューイは、「日本に韓国の未来をみる」、あるいは「日本は韓国の数年後の姿」と表現した。農村の国際結婚現象もその一つ。農村男性の結婚難の背景には、進学や就職のため農村から都市へ大量に移動する若者のうち、家を継ぐ長男以外は都市に留まることや都市と農村の格差問題がある。農村の国際結婚現象は、日本では80年代後半以降に始まり、韓国では2000年以降に劇的に増加した。韓国では2007年に多文化家族法が制定され、国家施策として結婚移住女性の支援を始めたが、日本にはそうした動きは今のところみられない。これは、社会保障制度と個人化の深化に起因しているのかもしれない。

日本で介護保険の論議が始まったのは1995年。1997年に介護保険法が成立し、2000年に施行された。決して十分な制度とは言えないが、介護保険法の施行により「結婚」によらない老親介護の選択肢が加わり、結婚はより個人の選択に委ねられるものとなった。今後、韓国でも

社会福祉制度の整備に伴って結婚圧力が減じるのかどうか。その中で、現在問題となっているような業者仲介による国際結婚の割合は減少するのかどうか。今後の推移に注目したい。

5. 軌道修正の場としての日本

インタビューイを大きく3つのコーホートに分けてみたい。便宜的に生年を元にA、B、Cに分ける。1965年から70年に生まれたA世代は、民主化闘争に直接あるいは間接的に関わり、通貨危機では失業するなど直接的な影響を受けた。1971年から80年に生まれたB世代は、通貨危機の時期には高校生か大学生で、親の経済状況の激変により進路変更を迫られた者もいる。また、B世代は日韓のワーキングホリデー制度を初めて利用できた世代でもある。1981年から91年に生まれたC世代は、もの心ついた時には韓国がOECDに加盟していたので、貧困を知らない「新世代」と言えるだろう。

来日動機はコーホートによって特徴がある。A世代は、海外への憧れや閉塞感からの脱却という語りが目立つ。B世代は、「自分探し」や恋愛、夫の留学・転勤、会社派遣、ヘッドハンティング、結婚逃避など動機の多様化が進んだ。通貨危機による倒産や大学進学失敗、望まない学部進学を日本留学によって軌道修正を図ろうとする者も見られた。C世代は、ほとんどが留学生と日本語学校生である。彼ら／彼女らの語りから日本留学の制度化が進んだことが分かる。1997年に日本側がビザ取得のための保証人制度を撤廃したことにより、日本に人的なつながりがなくても、留学意欲と一定の経済条件があれば日本留学が可能になった。韓国側では、留学情報やビザ申請、宿舎の手配をビジネスとして提供する「留学院」が増え、留学希望者のニーズに答えている。

また、留学生の二極化も伺える。留学費用の全額を親の仕送りで賄う留学生がいる一方で、

授業料と生活費のためにアルバイトにかなりの時間を割かなければならない者もいる。インタビューの一人は、「同じクラスの韓国人 14 人のうちアルバイトをしているのは私を含めて 3~4 人。こんなにお金持ちの韓国人がいるのかと驚いた」と語った。さらに、C 世代には子ども時代に親の留学や転勤などで日本での生活経験がある者、また、ホームステイや修学旅行で来日した経験をもつ者もいて、この間の日韓の人的交流の深化を感じさせる。

3 つのコーホートに共通しているのは、「閉塞感からの脱却」である。ハージのいう「どこにも行き場がない」状況が思い浮かぶ。韓国内での激しい競争社会に対する疑問と疲労感について、「狭くて競争も激しくて窮屈な韓国」と表現し、また、「このまま（大学を）卒業するのは怖いのでちょっと逃げてきた」という「逃避来日」を伺わせる語りもあった。女性では、「父の躰が厳しくて日本で初めて自由を謳歌している」、「女性には日本の方が生きやすい」という語りも目立った。韓国社会における女性の生きにくさは、今も韓国人女性を越境へと向かわせる大きな要因のようだ。

6. もう一つの越境

この調査で話を聞いた 100 人は合法的な在留身分をもち、どちらかと言えば、来日により自己実現を果たしている人たちだ。その影に入っで見えにくいのが、韓国人非正規滞在者の存在も押さえておく必要があるだろう。非正規滞在者は大きく分ければ、超過滞在者（在留期間を超えて滞在を続けたために在留資格を失った者）と正規の入国手続きを経ないで入国した不法入国者がいる。超過滞在者のデータを見てみよう。ピーク時の 298,600 人（1993 年）から 78,488 人（2011 年）へと大幅に減少したが、国籍では韓国人がもっとも多く、全体の 24.6%（19,271 人）を占めている。超過滞在者の友人との関係

を語ったインタビューイは 1 名だったが、他にも超過滞在者とのつながりを持つ人がいると思われる。

非正規滞在者を生み出す要因は韓国内の格差問題であり、非正規滞在者の人権をどう捉えるかは日本社会の問題である。今年（2012 年）7 月に施行される改定入管法は、在留期間の途中でも居住地の届出が遅れた場合などに、「在留資格の取り消し」、つまり非正規滞在者になってしまう問題が指摘されている。在留資格の取り消しを受けると、外国人住民票から削除されてしまう。非正規滞在者に双方の社会の矛盾が現れていると考えれば、単純に非正規滞在者を排除し続けても、社会的亀裂を深めるだけで、非正規滞在者を生み出す社会構造が温存されてしまう。

国際的な人の移動の拡大は、グローバル化がもたらした皮肉の一つである。主権と国境を越える移動の管理を維持しようとする国家の意思との間の緊張の高まりは、多くの国々が抱える課題だ。まだ、この問題の解をどの国も見出せていない。入管制度は今後も不断に見直しが必要になるが、その時に、管理する側の思い込みや希望だけで制度を見直しても良い結果は得られないだろう。政策決定過程に、「正規」「非正規」双方の事情を体験的に把握するポジションにいる移住者を加えていくことは合理的な選択になるのではないだろうか。

7. 「近くてかけがえのない国へ」

韓国で海外渡航が自由化される以前に来日していた旅行者は年間約 30 万人。それが 1997 年に 100 万人を超え、2010 年には 244 万人に達した。日本から韓国への旅行者も 2010 年には 302 万人を数えた。年間 546 万人もの人々が日韓を来往している。こうした往来の機会の拡大は、双方の市民の間にあった心理的距離を着実に近づける効果をもたらしている。では、この

調査で対象とした中長期滞在者であるニューカマー韓国人はどれくらいいるのだろうか。ここでは、外国人登録者の「韓国・朝鮮」57万人から「特別永住者」（戦前から日本で暮らしていた人々とその子孫）40万人を除いた17万人という数を押さえておきたい。絶対数としてそれほど多くはないが、今後も増加傾向は続くだろう。

量的な交流機会の拡大の次の段階として、「近くてかけがえのない国」に歩を進めるには、日本で暮らす韓国人が日本に何を求め、どのような経験をし、どのような関係の中で生きているのかを知ることが第一歩になる。このプロジェクトでインタビューできたのはわずか100人に過ぎないが、等身大の同時代を生きるニューカマー韓国人の実像を伝える一助になるものと思う。

「東京は親戚のいるまち」「知り合いのいない釜山より東京の方が心理的に近い」と語る韓国人の存在は、これまでの移民理論に収まらないダイナミズムをもって、日本と韓国双方の社会に影響を与えている。着実に増加しつつある「韓国人でも日本人でもない」子どもたちの存在も重要だ。単一のアイデンティティや帰属を絶対と考えていては、この子どもたちを息苦しくさせるだけだろう。今、世界は多元的・複合的アイデンティティや帰属意識を肯定する時代に移行しつつある。移動の自由が保障されていれば、人々は集団への帰属意識を絶対化することなく、居住する場への帰属意識をもつことができるようになる。今回はニューカマー韓国人に着目したが、これは他の外国人にも、そして海外に可能性を求めようとする日本人についても適用できる。こうした人的な交流を通じた相互理解の積み重ねが、国際関係を平和で安定的なものにすることにつながるに違いない。

参考文献

ガッサン・ハージ、2007「存在論的移動のエスノグラフィ」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う—現代移民研究の課題』有信堂

古谷哲、2010「非正規滞在者と改定法」、外国人権連絡会編『外国人・民族的マイノリティ人権白書2010』、明石書店

트렌스내셔널인 생활권에서 살다

타케다 사토코

1. 「가깝고 먼 나라」

하네다공항에서 김포공항까지의 비행시간은 2시간반. 이것은 신칸센으로 동경에서 모리오카, 혹은 오오사카에 가는 것과 같은 정도의 시간이다. 그러나 최근까지 일본과 한국은「가깝고 먼 나라」라고 표현 되는데 많았다. 하나는 일본에 의한 조선의 식민지 지배와 일본에 남은 조선인에 대한 차별적 처우에 기인하고, 다른 하나는 한국에서의 반일교육의 영향도 있다. 덧붙여서 양국의 일반시민이 만나는 기회가 한정 되어있는 속에서 부정적인 이미지가 증폭 해 버린 면도 있다. 한국에서 민주화 선언이 이루어진 것은 1987년, 해외도항이 완전히 자유화 된 것은 1989년의 일이다.

뉴커머 한국인과 일본인의 접촉기회가 증가한 이 20년간은, 냉정의 종말에따른 글로벌화가 본격화 해 간 시기와 중복된다. 무엇이 변하고, 무엇이 변하지 않고 있는가. 뉴커머 한국인의 이야기에 귀를 기울이는 것을 통해서, 「가깝고 먼 나라」부터 「가깝고 둘도 없는 나라」가 되기 위해서 무엇이 관계성을 찾을 수 있지 않을까. 그러한 막연한 기대감으로부터 이 프로젝트에 참가하게 되었다. 나는 니이가타현 남부에서 살고 있는 결혼이주여성의 적응과정과 농촌사회의 변용에 관한 조사를 진행 해 왔다. 80년대 후반에 일본에 온 결혼이주여성은 한국인이 제일 많다. 민주화 선언

을 기다리지 못하고 결혼이라고 하는 채널을 사용해서 한국을 빠져 나온 여성들과, 도시부의 뉴커머 한국인에게는 어떠한 이동(異同)이 있는가. 100명의 라이브스토리를 만나게 된 기회에 마음이 매우 들떴다.

UN의 통계에 의하면, 2010년의 국외이민의 수는 2억1400만명으로 인구의 약 3%.숫자로는 1965년의 7500만명에서 3배로 증가했지만, 인구도 증가했기 때문에 비율은 불과 2.3%의 증가에 멈춰있다. 「이민의 시대」라고 불리우지만, 사람이 국경을 넘어서 이동하는 것은 지금도 그렇게 까지 쉽지는 않다. 그 한정된 역경기회를 잡아 권 라이브스토리는 변화하면서 어느 현실과, 그 앞에 향해야 만한 방향성의 길잡이를 지시 해 줄 것이라는 것은 틀림없다.

원쇼트·인터뷰의 한계는 있다고 생각하지만, 인터뷰이의 협력에 의한 귀중한 라이브스토리집을 편성할수 있다는 것에 먼저 감사드리고 싶다. 100명의 라이브스토리를 읽으면, 이주자들이 일본과 한국을 일체의 트랜스내셔널인 생활권으로서 살아가는 모습이 떠오른다. 본격적인 분석작업은 앞으로 하게 될 것이지만, 현 단계에서 느끼고 있는 것을 예비적으로 정리하는 것을 나의 감상으로 하고 싶다.

2. 20년간의 극적인 변화

많은 인터뷰이가 한류붐 이후, 「한국인이라는 것의 의미가 변했다」라고 이야기를 했다. 나는 그것과 같은 말을 농촌에서 지내는 한국인 여성들로부터도 들었다. 한류붐 이후, 고등학교와 공민관에서 한국어를 가르치게 된 여성들은 「20년전에는 일본인이 한국어를 배우고 싶어 한다니,상상할수 없었다.」라고 말한다. 민주화 직전에 26살에 결혼 해서 일본에 온 여성은, 「조금 더 참았다면, 나의 인생은 전혀 달랐을지도 모른다」라고 이야기 해 줬다. 「그 때」를 기다리지 못 한것은, 군사독재체

제와 유교적가치관의 아래에서의 살아가기 힘들었기때문이었다. 당시의 한국사회에는 결혼적령기를 넘은 여성이나 이혼한 여성들이 자기자신답게 살수있는 곳은 한정되어있었다.

한국은 1996년에OECD에 가맹한 직후에 아시아 통화위기에 휩쓸려, 2001년까지 IMF관리하에 있었다.같은 시기에 단계적인 일본문화의 개방이 시작되었다. 한국정부는 일본의 대중문화금압정책에 대해서, 「한국국민의 감정이 일본의 식민지 지배에 의한 상처 받은 채로, 완전히 치유 되지 않은 그 상태에서 일본문화의 무제한 유입을 용서하는 것은 한국국민의 감정을 조롱하는 것이다」라고 설명해왔다. 일본문화의 개방은 이러한 대일 감정을 능가할 정도의 한일 경제 보완 관계의 심화를 상징하는 사건이었다.

이미 90년대태생의 세대가, 유학생으로서 일본에 오기 시작했다. 이 세대는 어렸을 때부터 일본의 애니메이션에 친숙하고, 중학교 고등학교의 제2외국어로 일본어를 선택하고, 그것이 일본유학으로의 도선이 되고 있다. 그렇다고 하지만, 한류 붐이후에 일본에 온 유학생도 선배들로부터 그 이전의 일본에서의 엄격한 체험을 듣고, 사회견학으로서 일본의 식민지 하에서 사용되었던 형무소 흔적등을 방문해서 한일 역사에 대해서 배우고 있는 것을 알아주기 바란다고 말하는 사람이 있다. 한국의 젊은 사람들 대부분은 일본인과의 관계 만들기를 위해서 역사와 정치의 화제를 피하고 있다. 동세대의 일본의 젊은 사람에게는 회화가 성립하는 것만의 한일역사에 대해서 지식의 없다고 느끼고 있다. 한류붐을 표층적인 교류로 끝내지 말고 역사문제를 넘어서는 대화의 기회로 연결시키기 위해서는 먼저 일본 측에 의한 큰 개선의 여지가 있을 것 같다.

3. 마이널리티의 권리

100명의 라이브스토리를 읽어 가면, 그들 / 그녀들은, 「지금, 일본에 살고 있다」 것이고, 「이민」이라고 말 하는 것 보다는 「이주자」라는 말이 적절한 표현이라고 깨닫게된다. 원래 「사람은 왜 이동하는걸까」. 이 질문에 갓상·하지 (2007) 는 존재론적 이동성은 이라고 하는 개념을 제시하고 있다. 하지에 의하면, 사람은 「잘 되고있다」라고 느끼는 한 거기에 멈춘다. 하지만 「어디에도 갈 장소가 없다」, 혹은 「천천히 밖에 진행이 안된다」라고 느낄 때, 물리적 이동을 시험해 본다. 즉, 사람은 물리적으로 이동하기 전에 존재론적 자기에 의한 다른 물리적 공간 쪽에 보다 좋은 가능성이 있다고 느낄때, 이동한다는 것이다. 뉴커머 한국인에 의해서도 일본은 반드시 최중이주지가 아니다. 육아나 취로등 여러가지 조건에 제약을 받으면서 「잘 되지 않는다」라고 느끼게 되면 다시한번 이동을 시험해 본다. 그렇기 때문에 이주자는 이주후에도 출신지와 밀접한 관계를 유지한다. 이것이 복수의 귀속이나 복수의 아이덴티티, 다원적인 존재의 모습에 대한 논의가 주목되는 이유다.

한국과 일본을 하나의 생활권으로서 생활하는 뉴커머한국인도 물론, 양국의 출입국관리제도와 국적법등의 제약을 받는다. 즉, 국제결혼의 경우에는 가족이 법에 의해서 헤어질 가능성이 있다는 것은 중요하다. 부부가 서로의 상대국의 영주권을 취득하는 것이 현단계에서는 한일을 일체적 생활권으로서 생활하는 위에서 기본적인 신분보장이 된다. 또한 일본에서 육아를 하는 이주자가족은, 「일본인 만큼 일본어는 못하고, 한국인처럼 한국어는 못하는 어린이」와 「한국인도 일본인도 아닌 어린이」를 있는 그대로 받아들이고, 「어디나라 사람인가는 상관없다」라고 납득 하려고 한다. 「인종은 한국인이고 국적은 일본인」이라고 정리하고 가족전원이 일본국적을 취득한 사람

도 있다. 이주자에게는 국가영역에 의한 빼앗기지 않은 새로운 거주권이 필요하게 됐는지도 모른다.

이민=이주자는 받아들이는 나라에서는 마이널리티이다. 마이널리티의 권리선언 (1993년) 제2조 5항에는 「마이널리티에 속하는 사람들은……민족·문화·종교·언어적인 관계성을 가지는 타국시민과의 국경을 넘은 자유이고 평화로운 교류 아무런 차별도받지 않고 확립하고 유지 권리를 가진다」라고 하였다. 후루야 토오루 (2010)는 여기에서 "국경을 넘은, 출신지와 교통의 권리 '즉, 출신지와 거주지를 자유롭게 왕래하는 권리를 이끌어낼 것이 아닐까라고 주장하고있다. 일고 만하다. 자녀가 있는 이주자가 공통적으로 말한 것은, 아이의 교육과 문화 계승의 과제였다. 아이가 민족 문화와 언어를 상속 할 권리를 실현하기 위해서는 집단적인 공간이 필요하다. 문화는 집단 속에서 형성되고 상속되기 때문이다. 뉴커머 한국인의 이야기에서는 한국 학교와 교회 활동이 중요한 역할을 담당하고 있는 것으로 나타났다. 그러나 한국 학교에서 아이를 공부시키기 위해서는 경제적인 뒷받침이 있어야한다. 교회 활동도 신앙과 의 관계가 있고 일반화하는 것은 어렵다. 또한 이러한 기관을 이용할 수있는 것은 일정 수의 한국인이 거주하고 있는 신주쿠라는 특수 지역이기 때문이다. 어디에 살고 있는지에 관계없이, 어떻게 하면 아이의 민족 문화와 언어를 상속하는 권리를 보장할 수 있을까. 어려운 문제이지만, 일본에서도 마이널리티의 권리라는 관점에서 이주자의 인권에 대해 생각하는 것이 앞으로 점점 중요 해져 올 것이다.

4. 「압축된 근대」

"압축 근대 '는 근대화와 탈근대화가 진행하고 있는 상황을 나타낸다. 이 표현은 현재 한국을 파악하는 키워드 중 하나다. 한국 사

회의 급격한 변화를 이끈 것은 뭐니 뭐니해도 '한강의 기적'이라 불린 급속한 경제 성장이다. 그리고 그 영향이 단적으로 나타난 현상이 저출산이다. 1970년에는 4.5를 약간 웃 들었던 합계 출산율은 1980년대 초반 인구 대체 수준 2.0을 밑돌아, 2005년 1.08로 세계 최저를 기록했다.

정부는 "저출산 및 고령 사회 기본법"을 제정하여 대책을 시작했지만, 2010년 출산율은 1.23. 여전히 OECD 국가 중 가장 낮은 상황이다. 한편, 눈부신 경제 발전에 비해 한국에서 사회 보장 제도가 완비된 것은 외환 위기 이후다. 경제 발전 속도와 복지 제도의 정비, 개인 화의 진전과 가족 규범의 변화 등과의 사이에 생기는 간격도 "압축 근대"의 일면이라고 할 수 있다.

치열한 입시 경쟁을 거쳐 유능한 글로벌 인재가 되고, 기업 경영자로서 혹은 안정적인 취업자로 일하는 인터뷰이도, 한국에 있는 부모의 간호 및 노후에 대한 우려를 안고 있다.

언젠가는 "귀국" 또는 "부모님을 초청하고 싶다"는 사람도 있었다. 그러나 현재의 일본 입국 제도 아래에서는 부모 초청은 단기 체재를 반복할 수 밖에 없고, 간호가 필요하게 된 부모를 일본에서 돌보는 것은 어렵다.

일본과 한국은 닮은꼴이라고 말하는 인터뷰이는 "일본에 한국의 미래를 본다" 또는 "일본은 한국의 몇 년 후 모습"이라고 표현했다. 농촌 국제 결혼 문제도 그 하나. 농촌 총각의 결혼 난의 배경에는 진학이나 취업을 위해 농촌에서 도시로 대량 이동하는 젊은이 중 집을 잇는 장남 이외는 도시에 머물 수 있으며 도시와 농촌의 격차 문제가 있다. 농촌 국제 결혼 문제는 일본에서는 80년대 후반에 시작, 한국에서는 2000년 이후 크게 증가했다. 한국에서는 2007년 다문화 가족 법률이 제정되어 국가 시책으로 결혼 이주 여성 지원을 시작했는데, 일본에는 그러한 움직임은 당분

간 볼 수 없다. 이것은 사회 보장 제도와 개인화의 심화에 기인하고 있는지도 모른다.

일본 개호(介護) 보험의 논의가 시작된 것은 1995년. 1997년 개호(介護) 보험법이 성립되어 2000년에 시행되었다. 결코 충분한 제도라고는 말할 수 없지만, 개호(介護) 보험법의 시행으로 "결혼"에 의하지 않는 노친개호(老親介護)의 선택지가 더해져 결혼은 보다 개인의 선택에 맡기게 된 것이다. 앞으로 한국에서도 사회 복지 제도의 정비에 따라 결혼 압력이 감소할지 어떻게 되는지에 대한 여부. 그 중 현재 문제가 되고 있는 것은 업체 중개에 의한 국제 결혼의 비율은 감소할지, 앞으로의 추이에 주목하고 싶다.

5. 제도 수정의 장소로서의 일본

인터뷰이를 크게 3개의 코호트로 나누어 보고 싶다. 편의를 위해 생년을 바탕으로 A, B, C로 나눈다. 1965년부터 70년에 태어난 A 세대는 민주화 투쟁에 직접 혹은 간접적으로 관련되어, 외환 위기로 실직하는 등 직접적인 영향을 받았다. 1971년부터 80년에 태어난 B 세대는 외환 위기 시기에는 고등 학생 아니면 대학생으로 부모의 경제 상황의 격변으로 진로 변경을 재촉 당한 사람도 있다. 또한, B 세대는 한일 워킹홀리데이 제도를 처음 사용할 수 있었던 세대이기도 하다. 1981년부터 91년에 태어난 C 세대는 어느 정도 컸을 때 한국이 OECD에 가입했기 때문에 빈곤을 모른다 "새로운 세대"라고 할 수 있겠다.

일본에 오게 된 동기는 코호트에 의해 특정이 있다. A 세대는 해외에 대한 동경이나 폐색감으로부터 탈피라는 단어가 눈에 띈다. B 세대는 "자아 찾기"나 연애, 남편의 유학 전근, 회사 파견, 헤드 헌팅, 결혼 도피 등의 동기의 다양 화가 진행되었다. 외환 위기로 도산이나 대학 진학 실패 원치 않는 학부 진학으로 일본 유학에 의해 제도 수정을 도모하려고 하는

사람도 보였다. C 세대는 대부분이 유학생과 일본어 학교 학생이다. 그들 / 그녀의 이야기에서 일본 유학의 제도화가 이뤄진 것을 알수 있다. 1997 년 일본 측이 비자 취득을 위한 보증인 제도를 폐지함으로써 일본에 인적 유대 관계가 없어도 유학의욕과 특정 경제 여건이 된다면 일본 유학이 가능하게되었다. 한국 측에서는, 유학 및 비자 신청, 숙소 다양한 사업으로 제공하는 '유학원'이 늘고, 유학 희망자의 요구에 응하고있다.

또, 유학생의 양극화도 엿보인다. 유학 비용의 전액을 부모의 송금으로 조달 하는 유학생이있는 반면, 수업료와 생활비를 위해 아르바이트에 많은 시간을 할애해야 하는 사람도있다. 인터뷰이 한 사람은 "같은 클래스의 한국인 14 명 중 아르바이트를 하고있는 것은 저를 포함하여 3 ~ 4 명. 이렇게 부자 한국인이 있느냐고 놀랐다"고 말했다. 또한 C 세대는 어린 시절 부모의 유학이나 전근 등 일본에서의 생활 경험이 있는자 또한 홈스테이나 수학여행으로 일본을 방문한 경험이있는 사람도있고, 이전의 한일 인적 교류의 심화를 느끼게한다.

3 개의 코호트에 공통되는 것은, "폐색감에서 벗어나기"이다. 하지가 말하는 "어디에도 갈 곳이 없다"라는 상황이 떠오른다. 한국에서 치열한 경쟁 사회에 대한 의문과 피로감에 대해 "좁고 경쟁도 치열하고 딱딱한 한국"이라고 표현하며 "이대로 (대학을) 졸업하는 것은 무섭기 때문에 좀 도망쳐 왔다"라고 "도피 일본"을 엿볼 수있는 이야기도 있었다. 여성에게는 "아버지의 교육이 엄격해서, 일본에서 처음으로 자유를 즐기고있다" "여성에게는 일본이 더 살기 좋다"라는 이야기도 눈에 띄었다. 한국 사회에서 여성이 살아가기 어려운 것은 지금도 한국인 여성을 국경을 넘어오게 하는 큰 요인 같다.

6. 또 하나의 국경넘기

이 조사에서 이야기를 들었던 100 명은 합법적인 체류 신분을 갖고, 어느 쪽이라고 한다면, 일본에 오게 된 것을 통해서 자기실현을 이루고자 하는 사람들이다. 그 그림자에 들어가 보이기 어렵지만, 한국인 비정규 체류자의 존재도 파악하고 있어야 하는 것이다. 비정규 체류자는 크게 나누면 초과 체류자 (체류 기간을 넘어서 체류를 계속했기 때문에 체류 자격을 잃은 사람)과 정규의 입국 수속을 거치지 않고 입국한 불법 이민이었다. 초과 체류자 데이터를 보자. 피크 298,600 명 (1993 년)에서 78,488 명 (2011 년)로 크게 감소했지만, 국적이 한국인이 가장 많고 전체의 24.6 % (19,271 명)를 차지하고 있다. 초과 체류자인 친구와의 관계를 말했던 인터뷰이는 한명이었지만, 그 밖에도 초과 체류자와의 관계를 가진 사람이 있다고 생각된다.

비정규 체류자를 만들어 내는 요인은 한국의 격차 문제이고, 비정규 체류자의 인권을 어떻게 파악 할까에 대해서는 일본 사회의 문제이다. 올해 (2012 년) 7 월에 시행되는 개정 입관법은 체류 기간 도중에도 거주지 신고가 늦은 경우에, "체류 자격 취소", 즉 비정규 체류자가되어 버리는 문제가 지적 되고있다. 체류 자격의 취소를 받으면 외국인 주민 투표에서 제거되어 버린다. 비정규 체류자 쌍방 사회의 모순이 나타나고 있다고 생각하면, 단순히 비정규 체류자를 계속해서 제거해도 사회적 균열을 심화시키는 것 뿐이고 비정규 체류자를 만들어내는 사회 구조가 온존되어 버린다.

국제적인 사람의 이동 확대는 글로벌화가 가져온 아이러니 중 하나이다. 주권과 국경을 넘은 이동 관리를 유지하고자 하는 국가의 의사와의 사이의 긴장 고조는 많은 국가들이 안고있는 과제이다. 아직 이 문제에 대한 해결책을 어느 나라도 찾지 못했다. 입국 제도는

앞으로도 끊임없이 재검토가 필요하지만, 그때 관리하는 측면의 생각과 희망만으로 제도를 재검토해도 좋은 결과를 얻을 수 없을 것이다. 정책 결정 과정에 "일반" "비정규" 쌍방의 사정을 체험적으로 파악하는 위치에 있는 이민자를 더해가는 것은 합리적인 선택이 될 것이 아닐까.

7. 「가깝고 돌도없는 나라로」

한국에서 해외 여행이 자유화되기 이전에 일본에 있던 여행자는 연간 약 30 만명. 그것이 1997 년 100 만명을 넘어 2010 년에는 244 만 명에 달했다. 일본에서 한국으로 가는 여행자도 2010 년 302 만명이었다. 연간 546 만명의 사람들이 한일을 왕래하고있다. 이러한 왕래 기회 확대는 쌍방의 시민들 사이에 있던 심리적 거리를 꾸준히 접근 할 수 있는 효과를 가져오고 있다. 그렇다면 이 조사에서 대상으로 한 중장기 체류자인 뉴커머 한국인은 얼마나 있는 것일까. 여기에 외국인 등록의 "한국 · 조선"57 만명에서 "특별 영주자"(전쟁 전부터 일본에 살고 있던 사람들과 그 자손) 40 만명을 제외한 17 만명이라는 숫자를 파악하고 싶다. 절대 수로서는 그다지 많지는 않지만, 앞으로도 증가 추세는 계속될 것이다.

양적 교류 기회 확대의 다음 단계로 '가깝고 돌도없는 나라'로 단계를 진행하기 위해서는 일본에서 사는 한국인이 일본에 무엇을 요구하고 어떤 경험을 하고 어떤 관계 속에서 살고있는지를 알 수있는 첫 걸음이다. 이 프로젝트에서 인터뷰를 한 것은 불과 100 명에 불과하지만, 등신대의 동시대를 살아가는 뉴커머 한국인의 실상을 전하는 도움이 될 것으로 생각한다.

"도쿄는 친척이있는 마을" "아는 사람이 없는 부산보다 도쿄가 심리적으로 가깝다"고 말하는 한국인의 존재는 지금까지의 이민 이론

에 맞지 않는 역동성을 가지고 일본과 한국 쌍방의 사회에 영향을 주고있다. 꾸준히 증가하고 있는 "한국인도 일본인도 아닌 "아이들의 존재도 중요하다. 하나의 정체성과 귀속을 절대적으로 생각하고 있으면 이 아이들을 답답하게 하는 것 뿐이다. 지금 세계는 다원적 · 복합적 정체성과 소속감을 긍정하는 시대로 이행하고있다. 이동의 자유가 보장되어 있으면 사람들은 집단에서 귀속 의식을 절대화하지 않고 거주하는 장소의 귀속 의식을 가질 수 있게된다.

이번에는 뉴커머 한국인에 주목했지만, 이것은 다른 외국인에게도, 해외에 가능성을 구하고자 하는 일본인에 대해서도 적용할 수있다. 이러한 인적 교류를 통한 상호 이해의 축적이 국제 관계를 평화 안정적인 것으로 연결 하는 것임에 틀림없다.

참고 문헌

Ghassan Hage, 2007 "존재 론적 이동 에스노 그래피" 伊豫谷登士翁 편 "이동에서 위치를 묻는 - 현대 이민 연구 과제"有信堂
 후루야 토오루, 2010 "비정규 체류자와 개정법"외국인 인권 연학회 편 "외국인 · 민족적 소수자 인권 백서 2010", 明石書店

留学生として行ったインタビュー

呉世蓮 (オセヨン)

私の日本留学における主な生活領域は新宿区であると言っても過言ではない。私の留学生活と新宿区はとても深く関わっている。そのため、今回のインタビューでは留学生ならではの視点からインタビューを行いたいと思い、日本に来ている韓国人留学生を中心にインタビューを行った。また、元留学生でありながら、日本で勉学を終え現在はそれぞれの専門を活かして

日本で働いている方々にもインタビューを行った。

日本で留学をしようと思ったきっかけは様々であった。例えば「日本の文化が好き」、「日本はアジアにおける先進国」等々である。そのなかで、日本は韓国から近くて遠い国であるというイメージが強くて、隣国でありながら知らないところが多いという意見も多数あった。また例年、留學生の年齢も低くなりつつあり、日本で語学勉強だけではなく、日本で日本語による様々な学問を学びたいという傾向が多くみられた。

日本で留學生活を送っている留學生における大きな興味関心は次の通りである。それは交友関係、近い将来への進路などであることがインタビューを通してわかった。交友関係は日本人の友達や韓国人友達、そして他の国からきた同じ留學生の友達との関係である。せっかく日本に留學を来ているため、「日本人の友達ともっと交流をしたい」、しかし「寂しいので、つい韓国人の友達ばかりと遊んでしまう」など、交友関係におけるバランスをどのようにとればいいのかについて悩む留學生もいた。また、近い将来への進路に対する期待と不安を抱えていた。近い将来には「日本で就職をしたい」、「日本の大学院に入りたい」、「韓国に帰って就職をしたい」、「第3の国へ行きたい」など、現在の自分の勉強を活かして、次へのステップに進みたいという強い意志が多く留學生からみられた。近い将来のことは現在の生活に密接しつつ、韓国にいる家族のことも考えて少し変えていく可能性もあるだろうと感じた。

新宿区で留學生活を送っている共通点を持ちつつ、同じく韓国からの留學生である立場から行ったインタビューは、まるで自分自身に問い掛けているような気がした。とくに「近い将来への期待と不安」における彼らの気持ちは、私の気持ちを代弁してくれるように思えたので、

インタビュー中には思わず、何回もうなずいてしまった覚えがある。韓国のことわざに「家から出ると苦勞する」という言葉がある。やはり他国での生活は苦勞するのに違いないと思うが、留學をしようとする目的意識や自分自身を常に冷静にみるように心掛けると、苦勞する分きつと身に付くものが多くあるだろう。

유학생으로서 실시한 인터뷰

오 세 연

나의 일본 유학의 주요 생활 영역은 신주쿠 구라고해도 과언이 아니다. 나의 유학 생활과 신주쿠구는 매우 깊은 관련이 있다. 따라서 이번 인터뷰에서는 유학생으로서의 관점에서, 현재 일본에 와 있는 한국인 유학생을 중심으로 인터뷰를 실시했다. 또한 예전에 유학생이면서 일본에서 학업을 마치고 현재는 각각의 전공을 살려 일본에서 일하고 있는 분들에게도 인터뷰를 실시했다.

일본으로 유학을 오게 된 계기는 다양했다. 예를 들어 "일본의 문화가 좋아서", "일본은 아시아의 선진국"등등이다. 그 중에서도 일본은 한국에서 가깝고도 먼 나라라는 이미지가 강하고, 이웃 나라이면서 모르는 곳이 많다는 의견도 다수 있었다. 또 예년 유학생의 연령도 낮아지고 있고, 일본에서 어학 공부뿐만 아니라 일본에서 일본어로 다양한 학문을 배우고 싶다는 경향이 많이 보였다.

일본에서 유학 생활을 보내고 있는 학생의 많은 관심사는 다음과 같다. 그것은 교우 관계, 가까운 장래에 대한 진로 등으로 인터뷰를 통해 밝혀졌다. 교우 관계는 일본인 친구와 한국인 친구, 그리고 다른 나라에서 온 같은 유학생 친구와의 관계이다. 모처럼 일본에 유학을 왔기 때문에, "일본인 친구와 더 교류하고 싶다", 그러나 "외롭기 때문에, 한국인

친구들하고만 교류를 갖게 된다." 등 교우 관계의 균형을 어떻게 취하면 좋은가에 대해서 고민하는 학생도 있었다. 또한 가까운 장래에 대한 진로는 기대와 불안을 안고 있었다. 가까운 장래에 "일본에서 취직을 하고 싶다", "일본의 대학원에 들어가고 싶다" "한국에 돌아가 취업을 하고 싶다", "제 3의 국가로 가고 싶다" 등 현재 자신의 공부를 살려, 다음 단계에 진행하고자하는 강한 의지가 많은 유학생들에게 보였다. 가까운 미래에 대해서는 현재의 생활에 밀접한 관계도 있지만, 한국에 있는 가족도 생각하면서 조금씩 바꾸어 갈 가능성도 있을 것이라고 느꼈다.

신주쿠구에서 유학 생활을 보내고 있는 공통점을 가지면서, 또한 한국에서 온 유학생인 입장에서 진행한 인터뷰는 마치 내 자신에게 물어 보고 있는 듯한 느낌이 들었다. 특히 "가까운 장래에 대한 기대와 불안"에 대한 그들의 마음은, 내 마음을 대변해주는 것 같았다. 그래서 인터뷰 중에 나도 모르게, 몇번이나 고개를 끄덕인 기억이 난다. 한국 속담에 "집 나가면 고생이다"라는 말이 있다. 역시 타국에서의 생활은 힘들다는 게 틀림 없지만, 유학을 하고자 하는 목적 의식과 자신을 항상 냉정하게 보는 자세를 가진다면 고생 하는 만큼 얻는 것이 더 많이 있을 것이라고 생각한다.

隠れたライフヒストリー: プロジェクト終了の感想として

藤田ラウンド 幸世

本プロジェクトでは、新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー、100名分を記録として残すことを目標に、100人の方々の声に耳を傾けてきた。ライフヒストリーを記録する2年間の作業を振り返りながら、プロジェクト・メ

ンバーとしての「私」が見出したことを書き出し、本プロジェクトが一人の研究者にもたらした新たな視座を共有してみたい。

1. 「ニューカマー」「韓国人」というカテゴリー

まず、「ニューカマー」と「韓国人」というカテゴリーについてである。プロジェクト開始時には、ライフヒストリーの対象者たちを時間的区分としてオールドカマーと分けられる「ニューカマー」、そして長年新宿区の外国人登録者としてマジョリティを占めていた「韓国人」をインタビュー対象者として想定していた。しかし、インタビューを重ねるにつれて「ニューカマー」とする時間の区切りやそのカテゴリー自体がインタビューにふさわしいかどうか、また、時間区分で区切るとはいえ、「どの」時間で区切るのか、インタビューをする側とされる側の齟齬が生じることもあった。

「日本に来て、もう15年にもなるのに『私』はニューカマーですか、ははは」と苦笑いをしながら、しかしこちらにプロジェクトの中でニューカマーをどのように定義をするのかと間接的に尋ねられたことがある。このときは、韓国ではソウルオリンピック前後に海外渡航制限を緩めた時期で、日本の経済の景気がよかった1980年代後半以降に日本に移住をしたり、留学をしに来たりした人を韓国ニューカマーとして考えていると、プロジェクト・メンバーである宣元錫(2005)の論文¹からとっさに拝借した一つの1980年代後半という時間区分を伝えた。しかし、「ニューカマー」とはいつの頃に移住をした人なのか。地域のコミュニティの形成の仕方や移住を繰り返す人などを考慮した場合、

¹ 宣元錫(2005)「地域社会における多文化共生まちづくりへの挑戦」、依光正哲編著『日本の移民政策を考える』東京：明石書店、142-143.

すでに 20 世紀の日韓併合という歴史認識をもとにした、日本と韓国との関係性から派生した移住だけで「オールド」と「ニュー」と二項対立的に区分することは、21 世紀現在、もはや見合わなくなったのではないかと、今回のインタビューを通して肌で感じるようになった。

同時に、時間的区分としてのオールドカマーから分けるための「ニューカマー」というカテゴリーよりも、むしろ国家概念を超え、「韓国語を母語とする」といった言語から、または、「朝鮮族」というアイデンティティからカテゴリーを考えた方が、ライフストーリーにはふさわしいのではないだろうかとも考えたりした。実際に、プロジェクトでは、韓国語を母語とする中国国籍のインタビューも対象者になっている。ここにも現れているように、「ニューカマー」という時間の区切りとそのカテゴリー自体が 21 世紀には追い付いていないという現実と直面したわけである。インタビューを重ねる中で、個人のアイデンティティが表出したライフストーリーは、一つ一つが胸に迫り、相手の顔を見た時に、どのようにこうした朝鮮半島出身者と韓国語母語話者たちをカテゴリーとして分類できるのか、あるいは分類できないのかと考えさせられることも多かった。これは今後の大きな課題として残るものである。

社会言語学の観点からは、このプロジェクトと主旨は違うが、新宿区には 110 以上の国籍の外国人登録者が在住していることを考えた場合、コリアタウンを抱える新宿区にどのような「韓国語を母語とする移住者」がいるかも今後の研究テーマとして興味深いところである²。

² Garcia & Fishman(2002)はアメリカ合衆国の大都市、ニューヨークに存在する言語について調査を行い、それぞれの言語話者についてまとめたものだが、東京都や新宿区の多民族・多文化社会の言語に関わる包括的な調査はまだ見当たらない。

2. プロジェクト・メンバーの「立ち位置」

次に、このプロジェクトにおけるメンバーの研究者としての協働作業と「立ち位置³」について書き留めたい。本プロジェクトのライフストーリーを構築する作業は以下のように進められてきた。1) インタビュー者とコンタクトをとり、2) インタビューを行い、3) それを文字化し、4) トランスクリプションとなったインタビュー内容をもとにプロジェクト・メンバーがライフストーリーとしてまとめ、5) インタビュー者に読んでもらい、内容を確認してもらい、6) インタビュー者に承認をもらった原稿をプロジェクト・メンバー同士で読みあい、校正しあうという、ざっとまとめると 6 段階が基本となっている。この手順は、100 人のライフストーリーを 2 年間という期限内にまとめるために、本プロジェクトを行う際に考えられた作業過程である⁴。

本プロジェクトのメンバーは、それぞれ専門の学問領域を持つことから、プロジェクト全体は学際的な背景を持っている。さまざまな学問領域の観点で、それぞれがインタビューをライフストーリーとして仕立てていったわけだが、先の作業過程を見てもわかるように、実際には協働作業も多く行われている。具体的には、インターネット上のメーリングリストを通じて、インタビュー調査のフィードバックや進捗状況などの報告のためのやり取りや本プロジェクトに関わる合意形成のための話し合いなどが行われた。こうした協働作業とメーリングリスト上の交流を通して、インタビューをライフヒスト

³ 社会言語学を志向する藤田ラウンドは「構築主義的な姿勢」といいたいが、他の研究者たちが用いる用語とは異なる可能性があるため、ここでは一般的なことばとして留める。

⁴ インタビューマニュアルとその作業過程に関しては、プロジェクト・リーダーの渡辺(2010, 2011)によるトヨタ財団の報告会や日本社会教育学会の発表がある。

リーとして立体的に形成していったのだが、このときに目に見えない形で働いている共通点が、メンバー自らのプロジェクトに対する立ち位置ではなかったかと振り返ることができる。インタビューをライフヒストリーに構築するときの、書き手の、インタビューに対する立ち位置である。

もともとスタート時点のメンバーは、プロジェクト以前から「多文化社会」である新宿に興味を持ち、多文化社会研究会の仲間であった。今回のプロジェクトにあたっては、プロジェクト・メンバー間での最初の作業として、新たにインタビューマニュアルの作成を行うなど、インタビューの手順を確立するところから始め、マニュアルができたところでインタビューを開始した。インタビューに応じてくれる人を探すときには、「雪だるま式サンプリング (snowball sampling)」を行った。能智 (2011) は雪だるま式サンプリングをはじめ、便宜的サンプリング (convenience sampling)、場当たりのサンプリング (opportunistic sampling) は「研究者の関係作りの能力やネットワークのよさにも依存している」といっているが、今回のプロジェクトにもそれは当てはまる。自分たちのネットワークを駆使して、時間の都合、ジェンダーのバランスの相性などを考慮して、お互いにインタビューを紹介しあったりもした。このようなときにも、メンバーのインタビューに対する立ち位置が同じであったため、安心してインタビューを紹介することができたといえよう。

また、ライフヒストリーとして立体化するプロセスに、メーリングリスト上の交流が果たした役割は大きい。作業過程の6のメンバー同士でライフヒストリーを読みあい、校正するという協働作業の中で、メンバー一人ひとりがプロジェクトの立ち位置を互いに確認し、専門領域を越えて、プロジェクトの横糸が生まれたのではないかと考える。プロジェクト当初にはナラ

ティブ理論 (本プロジェクト中間報告書の河合 2010 を参照) を認識論として特に意識していなかったかもしれない (私を含む) メンバーも、今回のプロジェクトの協働作業を通して、ナラティブ理論を体得した、もしくは内面化したといえることができるかもしれない。

このプロジェクトは、単に 100 人のライフストーリーを提供するだけではなく、実際にはライフヒストリーを紡ぎだすために多様な協働作業を行った我々の側にも新たな視座を多く提供してくれた機会になったと私は捉えている。

3. 隠れたライフストーリー

本プロジェクトの副題にも挙げたように、このプロジェクトは新宿区の外国人住民のマジョリティである韓国国籍の、特に近年急増したニューカマーの人たちの背景を地元の新宿区に住む日本人住民の方々にも知ってもらいたいという動機から始まったものである。したがって、本プロジェクトは、初めから研究論文のための「研究」をするのではなく、インタビューの「声」とその人の意図に沿う形で「ライフヒストリー」という形にする基礎作業を目的とした。最終報告書には、目標の 100 名のライフヒストリーをまとめた一方で、この 100 名のライフヒストリーの裏側に、その声を公にすることができないままに留まったインタビューも存在することを最後に言及しておきたい。

プロジェクト開始時には、当初のプロジェクト・メンバー 10 人は、目安として一人 10 人分のインタビューを目指し、分担することになっていた。プロジェクトが進行する中で、果たして、私が行ったインタビューの 14 人のうち、11 人はライフヒストリーとして本プロジェクトの表舞台に登場させることはできたが、一方で表舞台に上がらないまま、インタビューだけのままに終わった 3 人のライフヒストリーが私個人の耳に残ったままである。

各プロジェクト・メンバーはインタビューの候補を探すために、まずは自分が関わる新宿区のフィールドにアプローチした。私は社会言語学という学問領域の中で、「学校」や「学校外」の日本語教育の現場を中心に外国につながる子どもたちをめぐる言語習得や言語教育政策などの調査を行ってきたので、理想としては、これまで手が届かなかったこうした子どもたちの親にインタビューをしたいという計画を立てた。結果としては、理想通り、複数名の親のインタビューを行うことができたのだが、しかし、その何人かはインタビューが終わった段階で、自分が話したインタビューの内容を文字化することに躊躇し、結局作業過程の2で止まってしまったままである。また、一人のインタビューに限っては、私の判断でやはり作業過程の2で止めてしまったことがある。インタビューの相手である3人はすべて女性である。

この3人のインタビューは、インタビューをする私が韓国の子どもの研究をしていることから、新宿区の教育に詳しく、自分の子どもの立場にたった目線で話を聞くことがわかると、日本の教育について、学校について、自分の子どもについて、目を輝かせて、よどみなく話をした。しかし、自分が話したことが、「もし新宿区の韓国社会の人が読むことになったら」と意識化したときに、顔を曇らせ、うつむいてしまった。日本人で教育に関わる専門家と話をしたことには満足し、インタビューそのものは肯定的に受け止め、ライフストーリーにすることも理解できた。しかし、自分が表舞台にできることをためらってしまったのである。インタビューに聞いてもらいたいことはたくさんあり、他の人と共有したい気持ちもあったが、しかし、それが文字化され、他の人の目に触れるようになった場合、新宿区の中の狭い韓国社会の中で、「自分」がどのように「他者」から評価さ

れるのかわからない、その恐れが心をよぎったといえる。

一人ひとり、それぞれの理由と事情により新宿区に住まうことになり、現在もさまざまな立場で新宿区に住んでいる。自分自身の個人の韓国での経験や日本に来たときの展望、日本社会で出会った新たな体験は語りたいが、自分の家族や職場が特定されてしまうのではないだろうか、人に迷惑をかけるのではないだろうかと考えた場合、たとえ個人の体験や決断であっても、表に出してはいけなないと考えてしまう。個人は家族や職場、社会から切り離して考えられないので、自分が同胞の韓国社会の中でどのように見られるのかは自分の生活や人生に関わってくる。3人とも女性であることから、韓国社会の中でのジェンダーについて考えさせられるのだが、同時に、母国から移動をしたときに長期的展望が持てず、見通しの立たない生活の中で生きる移住者としての「弱さ」もここから感じとることができる。

インタビューには何ができるのか。ライフストーリーを語るということがどのようなものなのかを考えるときに、「100人のライフストーリー」のプロジェクトの裏には、この隠れたライフストーリーが存在するという事実も覚えておきたい。

<参考文献>

河合優子 (2010) 「ナラティブ理論」, トヨタ研究財団 2009 年度研究助成 (D09-R-0422) 中間報告書『新宿のニューカマー韓国人のライフストーリー記録集の作——顔の見える地域作りのための基礎作業, 中間報告書』, 2-3.

宣元錫 (2005) 「地域社会における多文化共生まちづくりへの挑戦」、依光正哲編著『日本の移民政策を考える』東京:明石書店, 138-155.

能智正博 (2011) 『質的研究法——臨床心理学を学ぶ⑥』東京:東京大学出版会.

渡辺幸倫 (2011) 「ラウンドテーブル：社会教育におけるナラティブな方法の可能性 (2) 在住外国人支援における対話的研究手法：新宿のニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成」, 日本社会教育学会第 58 回大会, 2011 年 9 月 18 日.

Garcia, O. and Fishman, J.A. (eds.) (2002) *The multilingual Apple: languages in New York 2nd ed.*, Berlin: Mouton de Gruyter.

숨은 라이프 히스토리 : 프로젝트 종료의 감상으로

후지타 라운드 사치요

본 프로젝트에서는 신주쿠의 뉴커머 한국인의 라이프 히스토리 100 명분을 기록으로 남기는 것을 목표로 100 명의 분들의 목소리에 귀를 기울여왔다. 라이프 스토리를 기록하는 2 년간의 작업을 되돌아 보면서, 프로젝트 구성원으로 '내 자신'이 발견한 것을 적으면서 본 프로젝트가 한 연구자에게 제공한 새로운 관점을 공유하고 싶다.

1. "뉴커머" "한국인"이라는 카테고리

먼저 '뉴커머'와 '한국인'이라는 카테고리에 관해서이다. 프로젝트 시작시 라이프 히스토리 대상자들을 시간적 구분으로 올드 커머로 나눌 수 있는 '뉴커머', 그리고 오랫동안 신주쿠구 외국인 등록자로 과반수를 차지하고 있던 '한국인'을 인터뷰 대상자로 상정 했었다. 하지만 인터뷰를 거듭하면서 '뉴커머'라고 하는 시간의 구분과 그 카테고리 자체가 인터뷰이에게 적합한지 여부와 시간 구분과 나누기 라고는 해도, "어떤" 시간에서 구분하는지, 인

터뷰를하는 측과 받는 측의 상충하는 경우도 있었다.

"일본에 와서 벌써 15 년이나 되는데 '저'는 뉴커머입니까?, 하하하"라고 쓴웃음을 지으면서, 그러나 여기 프로젝트에서 뉴커머를 어떻게 정의 하느냐는 간접적으로 질문을 받은 적도있다. 이 때, 한국에서는 서울 올림픽을 전후해 해외 여행 제한을 풀었던 시기로 일본 경제의 경기가 좋았던 1980 년대 후반 이후 일본으로 이주를 하고 유학을 하러 온 사람을 한국뉴커머로 생각하고 있다고 프로젝트 멤버인 선원석 (2005)의 논문⁵에서 가져온 하나의 1980 년대 후반이라는 시간 구분을 전했다. 그러나 '뉴커머'는 언제쯤으로 이주를 한 사람인가. 지역 사회의 형성 방법 및 이주를 반복하는 사람 등을 고려하면 이미 20 세기의 한일 합방이라는 역사 인식을 바탕으로한 일본과 한국과의 관계에서 파생된 이주 단지 "올드" 며 "뉴"고 이항 대립적으로 구분하는 것은 21 세기 현재 더 이상 맞지 않는 것은 아닐까, 이번 인터뷰를 통해 피부로 느끼게 되었다.

동시에 시간적인 구분으로 올드커머에서 구분하기 위해서 '뉴커머'라는 카테고리 보다는 오히려 국가 개념을 넘어 '한국어를 모국어로 한다'라는 언어로부터 또는 "조선족"이라는 정체성에서 카테고리를 생각하는 것이 라이프 히스토리에는 어울리는 것이 아닐까라고 생각 하기도했다. 실제로 프로젝트는 한국어를 모국어로하는 중국 국적의 인터뷰이도 대상자로

⁵선원석 (2005) "지역 사회에서의 다문화 공생 마을 만들기에 도전,"依光 정철 편저 "일본의 이민 정책을 생각한다"도쿄 : 明石書店, 142-143.

되어있다. 여기에도 나타나 있듯이 '뉴커머'라는 시간 구분 및 카테고리 자체가 21 세기에 따라 붙지 않은 현실에 직면한 것이다. 인터뷰를 거듭하는 가운데, 개인의 아이덴티티를 표출했던 라이프 스토리는 하나하나가 가슴에 다가와, 상대의 얼굴을 보았을 때, 어떻게 이러한 조선한반도 출신자와 한국어 모국어 화자들을 카테고리로서 분류 할 수 있는지, 또는 분류 할 수 없는지라고 생각하게 된 일도 많았다. 이것은 앞으로의 큰 과제로서 남을 것이다.

사회 언어학적 관점에서 이 프로젝트와 취지는 다르지만, 신주쿠구에는 110 개 이상의 국적의 외국인 등록자가 거주하고 있다는 것을 생각하면 한인 타운을 안고 있는 신주쿠구에 어떤 "한국어를 모국어로하는 이민자"가 있을지도 모르는 향후의 연구 테마로 흥미로운 곳이다⁶.

2. 프로젝트 멤버의 "현재의 위치"

다음으로 이 프로젝트 구성원의 연구자로서의 협동 작업과 "현재의 위치"⁷에 대해 적고 싶다. 본 프로젝트의 라이프 스토리를 구축하는 작업은 다음과 같이 진행 해왔다. 1) 인터뷰이와 연락을 취하고, 2) 인터뷰를 실시, 3) 그것을 문자화 하고 4) 녹음 방송이 된 인터

⁶ Garcia & Fishman (2002)는 미국의 대도시 뉴욕에 존재하는 언어에 대해 조사하고, 각 언어 화자에 대해 정리한 것이지만, 도쿄와 신주쿠구의 다민족·다문화 사회의 언어에 관한 포괄 적인 조사는 아직 눈에 띄지 않는다.

⁷사회 언어학을 지향하는 후지타 라운드는 "구성주의적인 자세"라고 말하고 싶지만, 다른 연구자들이 사용하는 용어는 다를 수 있기 때문에 여기서는 일반적인 말로서 둔다.

뷰 내용을 바탕으로 프로젝트 멤버가 라이프 스토리로 정리 5) 인터뷰이에게 내용을 확인 받고, 6) 인터뷰이의 승인을 받은 문서를 프로젝트 멤버들끼리 읽고 교정을 한 후 약간의 정리를 하는 6 단계가 기본이 되어 왔다. 이 단계는 100 명의 라이프 스토리를 2 년이라는 기간 내에 정리하기 위해서 본 프로젝트를 수행할 때 생각 할 수 있는 작업 과정이다⁸.

본 프로젝트의 멤버들은 각자 전문 학문 영역을 가지고 있기 때문에 전체 프로젝트는 종합적인 배경을 가지고 있다. 다양한 학문 영역의 관점에서 각각 인터뷰를 라이프 스토리로 만들어 왔지만, 앞으로의 작업 과정을 봐도 알 수 있듯이 실제로는 협동 작업도 많이 행해지고있다. 구체적으로 인터넷에서 메일링 리스트를 통해 인터뷰 조사 의견과 진행 상황 등의 보고에 대한 교환이나 본 프로젝트에 관한 합의 형성을 위한 토론이 진행되어 왔다. 이러한, 협동 작업과 메일링리스트의 교류를 통해 인터뷰를 라이프 스토리로서 입체적으로 형성해 왔지만, 이 때 눈에 보이지 않는 형태로 일하고 있는 공통점이 회원 자신의 프로젝트에 대한 자신의 위치가 아니었나 돌아볼 수 있다. 인터뷰를 라이프 히스토리 로 할때의 쓰는 사람의, 인터뷰이에 대한 입지이다.

원래 시작 시점의 멤버는 프로젝트 이전부터 "다문화사회"라는 신주쿠에 흥미를 가져, 다문화 사회 연구회의 동료였다. 이번 프로젝트에 있어서 프로젝트 구성원간에 첫 작업으로 새로운 인터뷰 메뉴얼을 작성하는 등 인터

⁸ 인터뷰 설명서 및 작업 과정에 관해서는, 프로젝트 리더의 와타나베 (2010,2011)에 의한 도요타 재단의 보고회와 일본 사회 교육 학회 발표가있다.

뷰 절차를 확립하는 것으로부터 시작해서 메 뉴얼이 완성 된 후 바로 인터뷰를 시작했다. 인터뷰에 응해 줄 사람을 찾을 때는 "눈덩이 샘플링 (snowball sampling)"을 실시했다. 能 智 (2011)은 눈덩이 샘플링을 비롯한 편의적 샘플링 (convenience sampling), 임기응변적 인 샘플링 (opportunistic sampling)은 "연구 자의 관계 만들기 능력과 핫워크 장점에도 의존하고있다"라고 하고 있지만 이번 프로젝트 에 그것이 해당 되었다. 자신의 네트워크를 이용하여, 시간의 형편, 성별 균형 궁합 등을 고려하여 서로 인터뷰이를 소개하기도 했다. 이러한 경우에도 멤버의 인터뷰이에 대한 현 재 서 있는 위치가 동일하기 때문에 안심하고 인터뷰이를 소개 했다고 할 수있다.

또, 라이프 스토리로 입체화를 하는 과정에, 메일링리스트의 교류의 역할은 크다. 작업 과 정의 6 명 멤버들끼리 라이프 스토리를 읽고 서로 교정하는 협동 작업 중, 멤버 한 사람 한 사람이 프로젝트의 입지를 서로 확인하고 전문 영역을 넘어 프로젝트 관계줄이 만들어 진 것은 아닐까라고 생각한다. 프로젝트 초기 에는 내러티브 이론 (본 프로젝트 중간 보고 서 가와이 2010 참조) 인식론으로 특히 의식 하지 않았을지도 모른다 (나를 포함) 멤버도 이번 프로젝트의 협동 작업을 통해 내러티브 이론을 체득하고 또는 내면화 했다고 말 할 수 있을지도 모른다.

이 프로젝트는 단순히 100 명의 라이프 스토리를 제공하는 것 뿐만 아니라, 실제로는 라이프 스토리를 표출 하기 위해 다양한 협동 작업을 한 우리들의 측면에도 새로운 관점을 많이 제공해 준 기회가 되었다고 나는 그렇게

파악하고 있다.

3. 숨은 라이프 스토리

본 프로젝트의 부제에도 언급한 것 처럼 프 로젝트는 신주쿠구 외국인 주민의 과반수인 한국 국적의, 특히 최근 급증한 뉴커머 사람 들의 배경을 지역 신주쿠구에 사는 일본인 주 민분들에게도 알리고 싶다는 동기에서 비롯된 것이다. 따라서 본 프로젝트는 처음부터 연구 논문에 대한 "연구"를 하는 것이 아니라 인터뷰이의 "목소리"와 그 사람의 의도에 따르는 형태로서 "라이프 스토리"라는 형태로 하는 기초 작업을 목적으로 했다. 최종 보고서에는 목표 100 명의 라이프 스토리를 정리한 한편, 이 100 명의 라이프 스토리의 뒷면에 그 목 소리를 공개 할 수없는 상태에 머물렀던 인터뷰도 존재한다는 것을 마지막으로 언급하고 싶다.

프로젝트 시작 초기에는 프로젝트 멤버 10 명은, 한 사람 당 10 명 분의 인터뷰를 목표로 분담하기로했다. 프로젝트가 진행되는 가운데, 과연 내가 가진 인터뷰 14 명 중 11 명 은 라이프 스토리로서 본 프로젝트의 무대에 등장 시킬 수 있었지만, 다른 한편으로는 무 대에 오르지 못한 채 인터뷰 그냥 그대로 끝나고 3 명의 라이프 스토리가 내 개인의 귀에 남아있는채로 끝났다.

각 프로젝트 멤버는 인터뷰자의 후보를 찾기 위해, 우선 자신이 관련된 신주쿠구 필드 에 접근했다. 나는 사회 언어학이라는 학문 영역에서 "학교"나 "학교 외"의 일본어 교육 현장을 중심으로 외국으로 이어지는 아이들을 둘러싼 언어 습득과 언어 교육 정책 등의 조

사를 실시했기 때문에 이상적으로는 지금까지 손이 닿지 않았던 이러한 아이들의 부모와 인터뷰를 하고 싶다는 계획을 세웠다. 결과적으로 내 바램대로 여러 명의 부모와 인터뷰를 할 수 있었지만, 그러나, 몇몇은 인터뷰가 끝난 단계에서 자신이 말한 인터뷰 내용을 문자화하는데 주저하고 결국 작업 과정 2에서 멈춰 버린 상태이다. 또 한 명의 인터뷰에 한해서는, 나의 판단에서 역시 작업 과정 2에서 멈추어 버린 적도 있다. 인터뷰 상대인 3명은 모두 여성이다.

이 3명의 인터뷰이는 인터뷰를 하는 내가 한국의 어린이의 연구를 하고 있기 때문에, 신주쿠구 교육에 자세히 알고 있고 자신의 아이의 입장에 선 시선으로 이야기를 듣는 것을 알고 일본 교육에 대해서 학교에 대해서 자신의 아이에 대해서 눈에 빛이나면서, 거침없이 이야기했다. 그러나 자신이 말한 바 "만약 신주쿠구 한국 사회의 사람이 읽게되면"이라는 의식화 할 때, 얼굴색이 흐려지고, 고개를 숙이고 말했다. 일본인이고 교육 관련 전문가와 이야기를 하는 것으로 만족하고 인터뷰 그 자체는 긍정적으로 받아들이고, 라이프 히스토리도 하는 것도 이해 할 수 있었다. 그러나 자신이 무대에 나서는 것을 주저 해 버린 것이다. 질문자에게도 들어 주었으면 하는 것도 많이 있고 다른 사람과 공유하고 싶은 마음도 있었지만, 그러나 그것이 문자화 되어 다른 사람의 눈에 들어가게 되면, 신주쿠구의 좁은 한인 사회 속에서 '내 자신'이 어떻게 '타자'로부터 평가 될지 모르는, 그러한 우려가 마음에 지나갔다고 말 할 수 있다.

한사람, 한사람은 각각의 이유와 사정에 의해

신주쿠구에 살게 되어, 현재도 다양한 입장에서 신주쿠구에 살고있다. 자기자신 개인의 한국에서의 경험과 일본에 왔을 때 전망, 일본 사회에서 만난 새로운 경험은 말하고 싶지만, 자신의 가족과 직장이 특정되어 버리는 것은 아닐까, 사람에게 폐를 끼치는 것은 아닐까라고 생각하면, 비록 개인의 체험이나 결단이라도 밖으로 표출 해서는 안된다고 생각해 버린다. 개인은 가족과 직장, 사회로부터 분리하여 생각할 수 없기 때문에 자신이 동포의 한국인 사회에서 어떻게 보여지는지는 자신의 생활과 삶에 관련되어 온다. 3명 모두 여성이기 때문에, 한국 사회의 성별에 대해 생각하게 되는 것이지만, 동시에 모국에서 이동을 했을 때 장기적인 전망을 가질 수 없고 전망이 서지 않는 생활 속에서 살아가는 이민자로 "연약함"도 여기에서 느낄 수 있다.

인터뷰어는 무엇을 할 수 있을까. 라이프 스토리를 이야기한다는 것은 어떤 것인가를 생각할 때, 적어도 100 명의 라이프 스토리 프로젝트의 뒷면에는 이 숨어 있는 라이프 스토리가 존재한다는 사실도 기억하고 싶다.

<참고 문헌>

河合優子(2010) "내러티브 이론"도요타 연구재단 2009 년도 연구 조성 (D09-R-0422) 중간 보고서 "신주쿠의 뉴커머 한국인의 라이프 히스토리 기록집 작품 - 얼굴이 보이는 지역 만들기위한 기초 작업 중간 보고서 "2-3.

선원석 (2005) "지역 사회에서의 다문화 공생 마을 만들기에 도전," 依光正哲 편저 "일본의 이동 사람 정책을 생각한다 "도쿄 : 明石書店,138-155.

能智正博(2011) "질적 연구 방법 --- 임상 심리학을 배울 ⑥" 도쿄 : 도쿄 대학 출판회.

渡辺幸倫(2011) "라운드 테이블 : 사회 교육에 있어서 내러티브적인 방법의 가능성 (2) 거주 외국인 지원의 대화적 연구 방법 : 신주쿠의 뉴커머 한국인의 라이프 히스토리 기록집 만들기 "일본 사회 교육 학회 제 58 회 대회, 2011 년 9 월 18 일.

Garcia, O. and Fishman, J.A. (eds.) (2002) *The multilingual Apple: languages in New York, 2nd ed.*, Berlin: Mouton de Gruyter.

新宿ニューカマー韓国人のライフヒストリー調査を終えて

李 埈鉉

顔の見える地域づくりのための基礎作業として、2009年11月から「新宿ニューカマー韓国人のライフヒストリー記録集の作成」のため、インタビュー調査を始め、2年間100人の声を集めることができた。100人のそれぞれの「思い」とコミュニティにおける「つながり」と「絆」と「自立」の様相から、日本地域社会でともに生きる「協働」の実践が見えてきた。

2年間にわたり、11人のインタビューをおこなうなか、その後のフィードバックを通して得られた情報とお茶飲み友達が増えてきたのは確かである。つまり、初のインタビューの時には深くまで話さなかった内容が二度三度お会いして信頼関係が作られると もっと深い話や相談、そして、インタビューというフォーマルな形式でないことや、無公開ということの安心感からこぼれる本音等もたくさんあった。私自身、留学生として来日し、今は子育てをしている母親でもあり、教育学者である立場から、さまざまな年齢層の方たちと共有できる部分が多かった

のがその背景の一つとして考えられる。さておき、今回のリサーチを通して見えてきたさまざまな人々の思いのなか、子育てと教育に関わる部分を中心にいくつか述べる。

2年間という年月をかけたリサーチであるため、その間の環境の変化の影響は予想したものの、プロジェクトスケジュールの半分が過ぎた頃に直面した東日本大震災後のインタビューは、異なる傾向性や多文化社会に隠れていたさまざまな課題性を浮き彫りにしてくれたのである。特に、多文化間家族においては、選択と決断の間で苦戦する「思い」と「心のケア」と「絆」がたくさん見えていた。

多文化子育てにおいて多くの悩みは、教育特に言語教育と親子のアイデンティティと文化共有の点があげられる。今回のインタビューにおいても、親の立場にいる方たちの共通の悩みは同じ傾向を見せていた。それは、子どもが通う学校を選ぶ際に何に重点を置くかということで、東京韓国学校と日本の学校という二つの選択肢に分かれている。

韓国学校を選択する大きな理由としては、韓国語の習得に加え、イマージョン教育を実施している英語教育への充実がとても魅力的に作用していた。そして、親子のアイデンティティの共有と同じ文化圏としての同一感(クラスメイト達が韓国人で、韓国の苗字を使うなど)による情緒安定などがあげられた。

日本の学校を選ぶ理由としては、のびのびとした教育、勉強中心の教育ではなく全人教育に力を入れていることが魅力としてあげられ、異なりへの寛容性と日本人が持つ長所である基礎を大事にすることと計画性などを習得させたいということがあげられた。

子どもの教育に関しては、最良のこゝとを与えたい親心から悩みつづけているのが現実であった。

韓流ブームという時代の流れとともに、多くの日本人とコミュニティのなかで交流を深めながら暮らし、文化変容していくなか、日本で経済的に自立し、日本の文化・情緒面においても理解を深め、絆を築き、自己形成していくが、時には日本での居場所を見つけることの難しさに当面する様子も見えている。地域ネットワークへ加わることの難しさやコミュニティのなかで日本住民との付き合い、つながりをもつことの難しさなどがあげられていた。

異なる文化地域で生活しながら直面するさまざまな状況のなか、韓国人ニューカマーたちは、心の寄りどころとして共同体に属するケースも多く見られた。たとえば、教会共同体、韓人コミュニティ、留学生の集い、韓人事業家たちの集い、ネットを通じた韓国人同友会など、同じ文化・言語・情緒を共有できる人々との付き合いを通して、たくさんの情報交換を含め、異文化圏での経験談を交換し合い、お互いに教訓にしながら、心の慰めにもしている様相もうかがえた。

このように、文化圏の移動を通じた親密圏の変化は、自由奔放さもあるが、地域のなかでの疎外感も感じる。新しい親密圏を形成した人々は良く適応し、積極的に仕事を推進していく傾向がある。

100人という多くの方たちのナラティブをとおして、多様化社会におけるさまざまな課題も顕在化している。そして、東日本大震災後の励ましあう思いとケアする様子などから人々の愛と新たな絆もうまれていたのである。

共に生きる社会を構想する上で、共育、共働しながら絆を創っていく様相から、共に子育てするコミュニティ創造への期待が見えてきた調査であった。そのような近い未来像である日本の地域社会を描いてみると笑みがこぼれる。

신주쿠 뉴커머 한국인의 라이프 히스토리 조사를 마치고

이 호현

얼굴이 보이는 지역사회를 위한 기초작업으로, 2009년11월부터「신주쿠 뉴커머 한국인의 라이프히스토리 기록집 작성」을 위해, 인터뷰 조사를 시작하고, 2년간 100명의 삶의 음성을 모을수 있었다. 100명 각각의 「생각」과 지역사회에서의 「연결」과 「유대」와 「자립」의 양상으로 부터, 일본 지역사회에서 함께 살아가는 「협동」의 실천을 엿볼수 있었다.

2년간에 걸쳐서, 11명의 인터뷰를 하는 중에, 인터뷰 뒤의 피이드 백을 통해서 얻은 정보와 함께 차를 마시면서 간담할수 있는 친구가 증가한 것은 틀림없다. 즉, 처음의 인터뷰 때는 속 깊은 이야기 까지 하지 않았던 것이, 두번 세번째 차를 마시면서 신뢰관계가 형성됨으로써 깊이 있는 속애기와 상담들을 털어 놓았고, 인터뷰라는 정형의 틀을 벗어난 점과 무공개라는 점이 안심감을 더하면서 슬적 슬적 속내를 비추는 경우가 많았다.

또한, 저 자신이 유학생으로 일본에 와서 지금은 자녀를 키우는 엄마이고, 교육학자 라는 입장이다 보니, 다양한 연령층의 분들과 공유할수 있는 부분이 많았던 것도 그러한 배경의 하나로 작용했다고 본다. 아무튼 이번 조사를 통해서 알게 된 다양한 사람들의 사고 중에, 자녀양육과 교육에 관련된 부분을 중심으로 몇가지 서술하고자 한다.

2년간이라는 세월에 걸친 조사였기에, 그동안의 환경변화에 따른 영향은 예상했었지만, 프로젝트 스케줄의 반정도를 지난 시점에 직면한 동일본 대지진후의 인터뷰에 있어서는, 다른 경향성과 다문화 사회에 숨겨져 있는 다양한 과제성을 확연히 드러나게 했다. 특히, 다문화간 가족에 있어서는, 선택과 결단의 양면을 두고 고전분투하는 「생각」과 「심적인 케

어」와 「유대」가 많이 보였다.

다문화 양육에 있어서의 많은 고민들은, 교육 특히 언어교육과 부모간의 아이덴티티와 문화 공유라는 점을 들 수 있다. 이번의 인터뷰에서도 부모입장에있는 분들의 공통적인 고민으로 같은 경향을 보여주고 있었다. 그것은, 자녀들이 다니는 학교를 고를때에 무엇에 중점을 둘 것인가 라는 것으로, 동경 한국학교와 일본의 학교라는 두가지 선택 폭으로 나누어 진다.

한국학교를 선택하는 가장 큰 이유로는, 한국어 습득에 더하여, 집중교육(이머전)을 실시하고 있는 영어교육의 충실이 아주 매력적으로 작용하고 있었다. 그리고, 부모자녀간의 아이덴티티의 공유와 같은 문화권으로서 동일감(같은반 어린이들도 한국인으로, 한국인의 성을 사용하는 등)에 의한 정서안정등을 들 수 있다.

일본의 학교를 선택하는 이유로는, 구김살 없이 여유있는 교육, 공부중심의 교육이 아니라 전인교육에 힘을 기울이고 있는 것이 매력이라고 들고 있고, 다른점들에 대한 관용성과 일본인이 가지는 장점인 기초를 중요하게 생각하는 점과 계획성등을 습득시키고 싶다는 점을 들었다.

자녀교육에 있어서는, 최고의 것을 주고 싶은 부모마음으로 인해 계속적으로 고민해 나가야 하는 것이 현실이다.

한류붐이라는 시대의 흐름과 함께, 많은 일본인과 지역사회 속에서 교류를 나누면서 살아가고, 문화변용해 나가는 중에, 일본에서 경제적으로 자립하고, 일본의 문화/정서면에 있어서도 이해를 깊여가며, 유대관계를 만들고, 자기형성해 나가지만, 때때로 일본에서 자리를 찾는 것의 어려움에 봉착하게 되는 것도 보인다. 지역네트워크에 함께 속하는 것의 어려움과 지역사회 속에서 일본 주민과의 사귄이나, 연결을 가지는 것의 어려움 등을 들

고 있다.

다른 문화지역에서 생활하면서 직면하는 다양한 상황 속에서, 한국인 뉴 커머들은, 마음의 기댈곳으로서 공동체에 속하는 경우도 많이 보여진다. 예를들면, 교회공동체, 한인커뮤니티, 유학생 모임, 한인사업가들의 모임, 인터넷을 통한 한국인 동우회등, 같은문화, 언어, 정서를 공유할수 있는 사람들과의 사귄을 통해서, 많은 정보교환을 포함해서, 이문화권에서의 경험담을 서로 교환하면서, 서로간에 교환으로 하면서, 마음의 위안으로 삼고 있는 양상들도 보였다.

이렇게, 문화권의 이동을 통한 친밀권의 변화는, 자유스러움도 있지만, 지역속에서 소외감도 느낀다. 새로운 친밀권을 형성한 사람들은 잘 적응하고, 적극적으로 일을 추진해나가는 경향을 보인다.

100명이라는 많은 분들의 내러티브를 통해서, 다양한사회에 있어서 각양각색의 과제도 현재화 되었다. 그리고, 동일본 대지진 후의 서로 격려하는 마음들과 케어하는 양상들로부터 사람들의 사랑과 새로운 유대가 생겨나기도 했다.

함께 살아가는 사회를 구상하는데 있어, 함께 교육하며, 함께 일하면서 유대관계를 창출해 나가는 양상으로부터, 함께 양육하는 지역사회창출을 기대하며 희망을 엿볼수 있는 조사였다. 가까운 미래상으로서 그러한 일본의 지역사회를 그려보면 저절로 미소를 머금게 된다.

異文化コミュニケーションと歴史認識

河合優子

このプロジェクトでは、インタビュー参加者の人生の現在、過去、未来を話してもらってきた。その中で私が毎回こたわって質問に含めた

のは、日本で生活し、職場や学校で日本人たちと交流する中で、参加者の韓国人たちが日韓の歴史関係をどのように感じているのかということだった。

私が専門とする異文化コミュニケーションにおいては、相手および自分の出身国や地域の「現在」そして「過去」というものを無視できない。もちろん、歴史関係だけが「韓国人」や「日本人」という国民国家に関するアイデンティティや両者の関係を決定づけるものではない。加えて、国民アイデンティティだけでなく、ジェンダーや経済的な背景、年代、さらには個人的な価値観、そして個々の人々の人生の歴史なども両者のコミュニケーションに影響を与える。しかし同時に、韓国で生まれ、現在日本で生活しているニューカマー韓国人の人たちにとって、日本という外国にいるがために国民アイデンティティをより意識せざるを得ず、そこに日韓の歴史関係が密接に関わることも確かである。

主に 20 代の若いニューカマー韓国人のインタビューを通して再確認したのは、日本の同世代の人たちは韓国と日本の歴史的な関係について知らない人が多いこと、そして韓国人たちはそれを知っていてほしいと思っているが、それを日本の友人たちと語るの難しいと感じていること、そして同時に歴史関係だけで韓国人を捉えてほしくないことであった。

喧嘩になるだけだから日本の友人とはあまり歴史の話はしないというあるインタビュー参加者は、日韓の歴史関係をあまり知らない日本人とのギャップに関して、「越えられると思いますよ。でも、教えてくれないじゃないですか」と日本における歴史教育の課題を指摘した。別の参加者は、「今は気にしない、過去の話ですからあまり気にしない」が、日本が韓国を植民地化していたことは知っていてほしいと語っていた。同時に、「韓国人だからということにこだわらないでほしいというか。(中略)韓国人

に会うと、すぐ歴史の話とか、そういうことを言わないほうが…」という参加者もいた。ある参加者は「ちゃんと知ることによって、この問題について韓国人、あるいは中国人と話すときに、やっぱり真剣な姿勢が自然と持てるようになるんじゃないのかなと思うんですね。」と話してくれた。しかし、歴史的「事実」を知ることと同時にもしくはそれ以上に重要なのは、「事実」をどのように受け止めるのかということではないかと思う。別の参加者が、日韓の歴史関係の話になると「ごめんね、申し訳ない」と日本の友人がいうので気まづくなって話がしにくいと語ったように、過去を知りそれに対して謝罪をすることは大切なことだが、そこで対話が終了してしまっただけでは意味がない。

なにが「申し訳ない」のか、それをこれからどうしていくのか、という対話につながっていくような異文化コミュニケーションを実践するための歴史認識はどうあるべきなのか。そして、今回のプロジェクトの対象であったニューカマー韓国人だけでなく在日コリアンを含めた朝鮮半島に関わりのある人々とのコミュニケーションにおいて、このように歴史関係を意識すると同時に彼女・彼らをそれだけで捉えないということを異文化コミュニケーション教育の中でどのような概念や理論と絡めつつ、具体的にどのように教えていけるのだろうか。これらがこのプロジェクトを通して浮かび上がった私にとっての教育・研究上の課題である。

이문화커뮤니케이션과역사인식

카와이유우코(河合優子)

이 프로젝트에서는, 인터뷰 참가자에게서 인생의 현재, 과거, 미래에 대한 이야기를 들어왔다. 그 중에서 내가 매번 의식하면서 질문에 포함시킨것은, 일본에서 생활하고, 직장,

학교에서 일본인들과 교류하는 중에, 참가자인 한국사람들이 한일 역사관계를 어떻게 느끼고 있는가 라는 것이었다.

나의 전문분야인 이문화 커뮤니케이션에 있어서, 상대 즉 자신의 출신국이나 지역의 「현재」 그리고 「과거」 라는 것을 무시할수 없다. 물론, 역사인식 만이 「한국인」과 「일본인」 이라는 국민국가에 관한 아이덴티티와 양자의 관계를 결정짓는 것은 아니다. 더하여, 국민 아이덴티티 뿐만아니라, 젠더 와 경제적인 배경, 연령대, 더욱이는 개인적인 가치관, 그리고 개개인의 인생의 역사등도 양자의 커뮤니케이션에 영향을 미친다. 그러나 동시에, 한국에서 태어나서, 현재 일본에서 생활하고 있는 뉴커머 한국인들에게 있어, 일본이라는 외국에 있음으로 인해 국민아이덴티티를 더욱 의식하지 않을수 없고, 거기에 한일 역사관계가 밀접히 관계되는 것도 확실하다.

주로 20대 젊은 뉴커머 한국인의 인터뷰를 통해서 재인식 된것은, 일본의 동세대들은 한국과 일본의 역사적인 관계에 대해서 모르는 사람들이 많다는 것, 그리고 한국 사람들은 그것을 알고 있기를 바란다 고 생각되지만, 그것을 일본의 친구들과 이야기하는 것은 어렵다고 느끼고 있다는 것, 그리고 동시에 역사 관계 만으로 한국인을 붙잡고 있지 않았으면 한다는 것이었다.

싸움이 될 뿐이기에 일본인 친구와는 별로 역사이야기는 하지 않는다 라는 인터뷰 참가자는, 한일의 역사관계를 잘 모르는 일본인과의 겹에 관해서, 「넘어설수 있다고 생각해요. 하지만, 가르쳐주지 않잖아요」 라고 일본에 있어서의 역사교육의 과제를 지적했다. 다른 참가자는, 「지금은 별로 신경 안쓴다, 과거의 이야기 이기에 별로 신경쓰지 않는다」 지만, 일본이 한국을 식민지화 한 것은 알고 있기를 바란다 고 말했다. 동시에 「한국인이니까 라는 것에 구애되지 않기를 바란다 고 할까. (중략)

한국인을 만나면, 금방 역사 이야기 라던가, 그런것을 말하지 않는 편이...」 라는 참가자도 있었다. 어떤 참가자는 「 제대로 아는 것으로 인해, 그 문제에 대해서 한국인, 혹은 중국인과 이야기 할때에, 역시 진중한 자세가 자연스럽게 가져지지 않을까 라고 생각해요 」라고 이야기 해주었다. 그러나, 역사적 「사실」 을 아는 것과 동시에 , 혹은 그 이상으로 중요한 것은, 「사실」 을 어떻게 받아들일지 라는 것이 아닐까 생각한다. 다른 참가자는, 한일 역사관계의 이야기로 흐르면, 「미안하다, 죄송하다」라고 일본 친구가 말하므로 불편해져서 이야기 하기 어렵다고 말한 것처럼, 과거를 알고, 그것에 대해 사과하는 것은 중요한 것이지만, 거기에서 대화가 종료되어 버리면 의미가 없다.

무엇이 「죄송하다」 인 것인지, 그것을 앞으로 어떻게 해 나갈지, 라는 대화로 연결시킬 수 있는 이문화 커뮤니케이션을 실천하기 위해서 역사인식은 어떠해야 할까. 그리고, 이번의 프로젝트 대상이었던 뉴커머 한국인 뿐만아니라, 재일 교포를 포함한 조선반도에 관련된 사람들과의 커뮤니케이션에 있어서, 이렇게 역사 관계를 의식하는 것과 동시에 그들을 그것만으로 붙잡지 않을 것을 이문화 커뮤니케이션 교육속에 어떻게 개념이나 이론으로 섞으면서, 구체적으로 어떻게 가르쳐나갈 것인지. 앞으로가 이 프로젝트를 통해서 부상되어진 저자 신에게 있어서의 교육·연구상의 과제이다.

人はなぜ物語るのか

川村千鶴子

<ナラティブは長生きの秘訣>

「大久保通りには、よく馬が通るので、馬糞を踏まないように歩いたものです。暮れには職人さんの餅つきがあり、お正月は獅

子舞やはしご踊りがありました。この辺のお祭りは盛大でしたよ。・・・」

回転寿司で、たまたま隣合わせに座った青年から昔のことを聞かれて、大正生まれの母は、遠い昔の思い出を拾い起こす。一緒にお寿司をつまんでいたら、その青年は親切にも、危ないからと母をケアしながら混雑する大久保通りと一緒に歩いてくださった。母は、その青年が韓国出身であることに気づいていなかった。どこのお国の方でもよいのだ。「なにじん」であるかは、どうでもいいことなのだ。自分の物語を一生懸命に聞いてくれる人は有難いのだ。なぜ人は物語る時、生き生きとしてくるのだろう。人生を振り返り「なかなか面白い人生だった」と納得できることが老後を幸せにする。

ナラティヴは、長生きの秘訣かもしれないと思った。

<本当の「統合」とは何か>

「人生を物語ること」は、まさしく「人生を統合する」作業なのである。

自分の人生を振り返り肯定的に受容できることが、人生を「統合する」ことにつながる。それと同じで、多文化空間を肯定的に受容すること、それが「社会統合」の始まりなのである。

「人口減少社会だから、移民を大量に受け入れ、日本語教育を徹底させて、社会統合政策を推進する。大量に受け入れることは、共生コストにとっても効率がいい。」という文脈は、一見説得力があるように聞こえるかもしれないが、実は同化と管理政策につながる効率主義的な発想なのである。経済発展というのは、安い労働力を確保することから始まるのではなく、多文化空間の消費を活発にしていき、多様な安心の雇用政策を推進していくことから始まる。社会の分断を防ぐことが最も大切なのだ。

「統合」とは、人の移動の物語に寄り添うことであり、異文化を受容し、子育てや起業や留

学の悩みを共有することから始まる。統合を可能にするのは、日頃の会話力、つまりコミュニケーション力ではないだろうか。

<声を掛け合うことが地域コミュニティをつくる>

大久保通りを歩いていると、韓人会の方々を中心となっている道路の清掃ボランティアの方々ともよく出会う。

「いつもどうもありがとうございます。見違えるように綺麗になりますね。」

「掃除は気持ちいいし、楽しいですよ。」

「月1回なら、私も手伝おうかしら。」

「いやいや、無理しなくていいですよ。(笑)」

こんな会話の蓄積がコミュニティの基礎をつくっていく。つまり「社会統合」は、普段から声をかけあうことがすごく大切である。

つまり、新宿の韓国人ニューカマー100人にインタビューを行い、ライフヒストリーを自由に共有できるようにしたことは、声をかけやすくする一歩になってくれたらと思う。多文化生活圏の対話には、「国籍」とか「統合政策」「トランスナショナル」といった理論も難しい専門用語もいらない。むしろ、「こんにちは」「ありがとうございます」「元気？」といった対話のほうが大事なのだ。

それが、多文化空間の成熟した関係性をつくっていく一歩なのだから。

<多文化家族の物語>

沢山あって全部読み切れないが、毎日少しずつ読んでみると「人の移動と思考力」「豊富な日本語の語彙力と表現力」「未来を切り拓く力」の3つの力の成長を感じる。それにみんな「悩んでいる」ことがわかる。「お互いの悩みを知る」ことが建設的な対話を生み出すの秘訣でもある。

例えば、李埈鉉が、指摘するように子どもの学校の選択に、東京韓国学校と日本の公立学校という二つの選択肢がある。韓国学校は、韓国語の習得に加え、イマージョン教育を実施している英語教育の充実が魅力的だ。さらに親子のアイデンティティの共有とクラスメイト達が韓国人で、韓国の苗字を使うことによる情緒安定などがあげられた。

一方、日本の公立学校は、のびのびとした教育、勉強中心の教育ではなく全人教育に力を入れている。異なりへの寛容性と日本の教育の長所と思われる基礎力と計画性重視などが習得させたいということがあげられた。無償であることも大きな魅力だ。

「なるほど・・・」と多文化家族の移動の悩みを共有するところに、多文化共生が始まる。人の移動と「多文化家族の物語」を聞いてみて初めて分かることが多い。

行政や教育に係わる人は、家族の悩みの内面は、プライバシーだからと入りにくいのではないだろうか。家族の内面は、実は公共圏と重なり合おうとしている。とても大切な視座なのだ。新宿のような都会に生きている人は、隣の家の内実を知る必要がないと思う。「個人主義」「都会的な生き方」「匿名性」重視が、可視化できない社会をつくってしまう。実はそれが、社会の分断をつくっていく始まりなのである。

＜『新宿のニューカマー韓国人のライフストーリー記録集の作成-顔の見える地域作りのための基礎作業-』の感想＞

インタビューをまとめたものを Web ページで公開している。（訪問者数：約 3900 人（重複除く））、印刷物は合計 4120 部、『記録集 1』（2010 年 5 月、500 部）、『記録集 2』（同年 9 月、750 部）、『中間報告書発行』（同年 10 月、1000 部）、『記録集 3』（2011 年 5 月、500 部）、『記録集 4』（9 月、500 部）『最終報告書』（10

月、870 部））を発行した。このようなライフストーリーの記録集を収録し、報告書として公表する。

それはかつての日韓の関係性を思えば、想像を絶するほど意義あることだと思う。

もちろん、韓国人ニューカマーだけやればいいというわけではない。オールドカマーもほかの 113 か国の人びとの様子ももちろんインタビューしたい。

まずは、韓国語と日本語の併記で端緒を開いた労作を評価したい。

＜今後の課題とアーカイブ化＞

今後の課題は多い。本当に「顔の見える地域づくりに貢献したであろうか」「語彙力のない人びとのインタビューはどうするのだろうか。」

「非正規滞在者や極度に困窮したり、精神的に不安定な人は登場していない。」「語れないこと、沈黙の声をどのように甦らせるのか」など課題が多い。そうした課題の解決のヒントもインタビューから引き出せるのだ。

例えば、韓国人ニューカマーは、心の寄りところとして共同体に帰属する。李によれば、教会共同体、韓人コミュニティ、留学生の集い、韓人事業家たちの集い、ネットを通じた韓国人同友会など、同じ文化・言語・情緒を共有できる人々との付き合いを通して、情報交換を含め、異文化圏での経験談を交換し合い、お互いに教訓にしながら、心の慰めにもしている様相もうかがえる。（李埈鉉 2012 「新宿ニューカマー韓国人のライフストーリー調査を終えて」）

そうした移民が創造したネットワークとの社会的つながりを増やしていくことが大切である。それは街づくりにとって大切なことだ。報告書をどこに配布して 100 人のライフストーリーを共有すべきなのか。偏りのない配布の仕方も考えなければならない。

歲月の流れは速い。ニューカマーと呼ばれる人びとは、10年後にはオールドカマーと呼ばれるようになる。歴史的に貴重なデータのアーカイブ化が必要になるだろう。オーラルな調査資料をどのように保存し、公表していくのか。近年、インタビュー調査やオーラル・ヒストリーなど、質的調査法が広がり、研究成果が着実に蓄積されている。質的調査に取り組んだ私たち研究者は、調査の産物としてインタビュー・テープやフィールドノートなど質的資料を手元に抱える。正しい資料の取り扱いとアーカイブ化は、次の課題と言えよう。

사람은 왜 이야기를 하는걸까

카와무라 치즈코

<내러티브는 장수의 비결>

"오오쿠보 도오리에는, 말이 자주 지나가기 때문에, 말 똥을 밟지 않게 조심해서 다녔지요. 연말에는 장인들의 모찌쯔키(떡 치기)가 있고, 새해에는 사자춤(獅子舞)와 사닥다리춤(はしご踊り)이 있었죠. 이 부근의 마찌리는 성대 했어요."

회전스시에서 우연히 옆자리에 앉았던 청년이 옛날 것들에 대해 물어서, 타이쇼(大正) 생인 어머니께서는, 즐거웠던 추억들을 풀어놓으셨다. 「맛있어요, 맛있어요!」라며 스시를 집어먹고 있으니, 친절하게도 그 청년은 위험하다면서 어머니를 돌보면서 혼잡한 오오쿠보 거리를 함께 걸어주었다. 어머니는 그 청년이 한국출신이라는 것을 전혀 눈치채지 못했다. 어느나라 사람이라도 상관없었다고 생각된다. 자신의 이야기를 열심히 들어주는 사람은 고마운 것이다. 왜 사람들은 이야기하는 동안 힘이 넘쳐 나오는 것일까. 인생을 되돌아 보며 "꽤 재미있는 인생이었다"고 납득할 수 있는 것은 노후를 행복하게 한다.

내러티브는 장수의 비결일지도 모른다고 생각했다.

<진짜 '통합'이란 무엇인가>

"인생을 말해주는 것"은 바로"인생을 통합하는"작업 것이다.

자신의 삶을 되돌아보며 긍정적으로 수용할 수 있는 것이 인생을"통합하는"것에 연결된다. 그것과 같고, 다문화 공간을 긍정적으로 수용하는 것, 그것이 "사회 통합"의 시작인 것이다. "인구 감소 사회이기 때문에 이민을 대량으로 받아 일본어 교육을 철저하게하고, 사회 통합 정책을 추진한다. 대량으로 받아들이는 것은, 공생 비용에있어서도 효율이 좋다"라는 문맥은, 일견 설득력이 있는 것 처럼 들릴지도 모르지만, 실은 동화와 관리 정책으로 이어질 효율주의적인 발상이다. 경제 발전이라는 것은 값싼 노동력을 확보하는 것부터 시작하는 것이 아니라 다문화 공간 소비를 활발하게 하고 있고, 다양한 안심의 고용 정책을 추진 해 나가는 것으로부터 시작된다. 사회의 분단을 막는 것이 가장 중요한 것이다.

"통합"은 사람이 이동하는 이야기에 귀를 기울이고 다른 문화를 수용하여 자녀 양육이나 기업이나 유학 고민을 공유하는 것으로부터 시작된다. 통합을 가능하게하는 것은 평소의 회화력, 즉 커뮤니케이션 능력이 아닐까.

<서로 말을 건네는 것이 지역 사회를 만든다>

오오쿠보 거리를 걷고 있으면, 한인회 분들이 중심이 된 도로청소 봉사자 분들과 잘 만난다.

「항상 감사드립니다. 몰라보게 깨끗해졌어요.」

「청소는 기분도 좋고, 즐겁습니다」

「월 1 회정도는 저도 도와드릴까요」

「아닙니다. 무리하지 마십시오. (웃음)」

이런 이야기의 축적이 커뮤니티의 기초를 만

들어 간다. 즉 '사회 통합'은 평소부터 서로 말을 건네는 것이 무척 중요하다.

즉, 신주쿠의 한국인 뉴커머 100 명 인터뷰를 실시, 라이프 히스토리를 자유롭게 공유할 수 있도록 한 것은 말을 더욱 쉽게 건넬 수 있는 첫 단계가 되어 주었으면한다. 다문화 생활권의 대화에는 '국적'이나 '통합 정책' '트랜스 내셔널'이라는 이론도 어려운 전문 용어도 필요 없다. 오히려, '안녕' '고마워' '잘 지내?' 라는 대화가 더 소중한 것이다.

그것이 다문화 공간의 성숙한 관계성을 만들어 가는 첫 단계이기 때문에.

<다문화 가족 이야기>

많이 있어서 전부 읽을 수는 없지만 매일 조금씩 읽어 보면 '사람의 이동과 사고력' '풍부한 일본어 어휘력과 표현력' '미래를 개척하는 힘'의 3 개의 힘의 성장을 느낀다. 게다가 모두 '고민하고있다'는 것을 알수있다. '서로의 고민을 알다'는 것이 건설적인 대화를 창출하는 비결이기도하다.

예를 들어,이 이호현이, 지적한대로 자녀의 학교 선택에, 도쿄 한국 학교와 일본의 공립 학교라는 두 가지 선택이었다. 한국 학교는 한국어 습득과 함께 몰입 교육을 실시하고 있는 영어 교육의 충실이 매력적이다. 또한 부모와 자녀가 아이덴티티 공유와 클래스 메이트들이 한국 사람이고, 한국의 성씨를 사용하는 것에 의한 정서안정 등이 꼽혔다.

한편, 일본의 공립학교는 느긋한 여유가 있는 교육, 공부 중심의 교육이 아닌 전인 교육에 힘을 쏟고있다. 다른 점에 대한 관용성과 일본의 교육 제도의 장점이라고 생각되는 기초 능력과 계획성 중시 등을 습득 시키고 싶다는 것들도 꼽혔다. 무상 이라는 것도 큰 매력이다.

'과연 . . .'라고 다문화 가족의 이동의 고민을 공유하는 곳에, 다문화 공생이 시작된다.

사람의 이동과 '다문화 가족 이야기'를 들어보고 처음 알게 된 경우가 많다.

행정 및 교육에 관련된 사람은, 가족의 고민인 내면은 개인 문제이기 때문이라고 들어가기 어려운 것이 아닐까. 가족의 내면은 사실 공공권과 겹쳐 질려고 하고있다. 매우 중요한 관점인 것이다. 신주쿠 같은 도시에 살고있는 사람은 이웃집의 내실을 알 필요가 없다고 생각한다. '개인주의' '도시적인 삶' '익명성'중시가 가시화 할 수없는 사회를 만들어 버린다. 사실 그것이 사회의 분단을 만들어가는 시작인 것이다.

<신주쿠의 뉴커머 한국인의 라이프 히스토리 기록집 작성 - 얼굴이 보이는 지역 만들기를 위한 기초 작업 -의 감상>

인터뷰를 정리한 것을 Web 페이지에 공개하고있다. (방문자 수 : 약 3900 명 (중복 제외)), 인쇄는 총 4120 부, '기록 1 집' (2010년 5 월 500 부), '기록 2 집' (같은 해 9 월, 750 부) , '중간 보고서 발행' (같은 해 10 월, 1000 부), '기록 집 3 ' (2011년 5 월 500 부), '기록 집 4 ' (9 월, 500 부) '최종 보고서' (10 월, 870 부))를 발행했다. 이러한 라이프 히스토리 기록집을 수록하고 보고서로서 공표한다.

그것은 과거의 한일 관계를 생각하면 상상을 초월할 정도의 의미가 있다고 생각한다.

물론, 한국인 뉴커머 뿐만 하면 좋다는 것은 아니다. 올드 커머도 다른 113 개국의 사람들의 모습도 물론 인터뷰하고 싶다.

먼저 한국어와 일본어를 함께 표기함으로써 실마리를 열었다는 업적을 평가하고싶다.

<향후의 과제와 아카이브화>

앞으로의 과제는 많다. 정말 '얼굴이 보이는 지역 만들기에 공헌한 것 일까' '어휘력이 없는 사람들의 인터뷰는 어떻게 하는 것일까' '

비정규 체재자나 극도로 곤궁하고, 정신적으로 불안정한 사람은 등장하지 않다' '말할 수 없는 것, 침묵의 목소리를 어떻게 부활시킬 것인가'등 과제가 많다. 이러한 과제의 해결 방법에 대해서도 인터뷰에서 꺼낼 것이다.

예를 들어, 한국인 뉴커머는 마음이 머무는 곳으로서 공동체에 귀속한다. '이'에 의하면, 교회 공동체, 한인 커뮤니티, 유학생 모임, 한인 사업가들의 모임, 인터넷을 통한 한국인 동우회 등 같은 문화·언어·정서를 공유할 수 있는 사람들과 교제를 통해 정보 교환을 포함한 다른 문화권의 경험담을 교환하고 서로에게 교환을 전하면서 마음의 위안도 되고있는 양상도 엿보인다. (이호현 2012 '신주쿠 뉴커머 한국인의 라이브히스토리 조사를 마치고')

이러한 이민이 창조한 네트워크와의 사회적 관계를 늘려가는 것이 중요하다. 그것은 도시 계획에 있어서 중요한 것이다. 보고서를 어디에 배포하고 100 명의 라이프 히스토리를 공유해야 하는 것인가. 치우치지 않는 배포 방법도 생각해야 한다.

세월의 흐름은 빠르다. 뉴커머라고 불리우는 사람들은 10년 후 올드 커머라고 불리어지게 된다. 역사적으로 귀중한 자료의 아카이브화가 필요하게 될 것이다. 조사 자료를 어떻게 저장하고 공표해 가는 것인가. 최근 인터뷰 조사와 오럴 히스토리 등 질적 조사 방법이 있고, 연구 성과가 꾸준히 축적되고 있다. 질적 조사에 임한 우리 연구원은, 연구의 산물로서 인터뷰 테이프와 필드 노트 등 질적 자료를 안고 있다. 정확한 자료의 처리 및 아카이브화는 다음의 과제라고 할 수 있다.

プロジェクトメンバー／프로젝트 멤버

渡辺 幸倫 (わたなべ・ゆきのり／와타나베 유キノ리) 相模女子大学学芸学部准教授／社会教育、言語教育

若園 雄志郎 (わかぞの・ゆうしろう／와카조노 유시로) 北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 博士研究員／多文化教育、少数民族の教育

川村 千鶴子 (かわむら・ちづこ／카와무라 치즈코) 大東文化大学環境創造学部教授／移民政策、多文化社会論

宣 元錫 (そん・うおんそく／선원석) 中央大学総合政策学部兼任講師／社会政策、労働問題、移民政策

藤田ラウンド 幸世 (ふじたらうんど・さちよ／후지타라운드 사치요) 国際基督教大学教育研究所 研究員／社会言語学、バイリンガル教育

河合 優子 (かわい・ゆうこ／카와이 유코) 立教大学異文化コミュニケーション学部准教授／異文化コミュニケーション、メディア論

李 坪鉉 (い・ほひょん／이호현) 早稲田大学教育・総合科学学術院非常勤講師、和洋女子大学人文学部非常勤講師／社会教育、文化間移動者の文化変容

武田 里子 (たけだ・さとこ／타케다 사토코) 明星大学非常勤講師・放送大学東京文京学習センター非常勤講師／地域社会学、多文化社会論

堀内 康史 (ほりうち・やすし／호리우치 야스시) 大東文化大学環境創造学部非常勤講師／社会学

呉 世蓮 (お・せよん／오세연) 早稲田大学 教育・総合科学学術院 助手／生涯教育、多文化教育の日韓比較

李 恵美 (い・へみ／이혜미) 筑波大学大学院人文社会科学研究科／国際地域研究

崔 佳英 (ちえ・かよん／최가영) 東京大学大学院総合文化研究科／教育社会学、移民政策、教育とマイノリティ

活動の記録 / 활동 기록

2009年

- 11月準備 (理論的背景、インタビュー・発表方法などの確認、紹介リーフレット・HPの作成など)
- 12月パイロット調査 (少数のインタビューを元に意見交換し詳細な方法を決定)

2010年

- 3月 (1月) 인터뷰開始
- 5月 (4月) 『記録集1』公開 (印刷物500部、ホームページなど)
- 9月 (8月) 『記録集2』公開 (印刷物750部、ホームページなど)
- 10月 (9月) 中間報告会 (於: 多文化社会研究会)・『中間報告書』(1000部)、トヨタ財団 2010年度研究助成プログラム・アジア隣人プログラム助成金贈呈式で報告

2011年

- 5月 (3月) 『記録集3』公開 (印刷物500部、ホームページなど)
- 9月 (7月) 『記録集4』公開 (印刷物500部、ホームページなど)、日本社会教育学会第58回大会で報告 (渡辺)
- 10月 異文化コミュニケーション学会第26回年次大会にて報告 (藤田ラウンド)
- 11月 第5回多文化社会実践研究・全国フォーラム研究発表セッションで報告 (武田)

2012年

- 5月 (2011年10月) 『最終報告書』(870部、ホームページ、CD-ROMなど)

*括弧内は当初の予定

2009년

- 11월 준비 (이론적 배경, 인터뷰·발표방법 등 확인, 소개장·HP 작성 등)
- 12월 예비조사 (소수의 인터뷰를 바탕으로 의견교환하고 자세한 방법을 결정)

2010년

- 3월 (1월) 인터뷰 개시
- 5월 (4월) 『기록집1』 공개 (인쇄물500부, 홈페이지 등)
- 9월 (8월) 『기록집2』 공개 (인쇄물750부, 홈페이지 등)
- 10월 (9월) 중간보고회 (장소: 다문화사회학회 연구회)・『중간보고서』(1000부), 토요타 재단2010년도 연구 조성 프로그램·아시아 이웃 프로그램 조성금 증정식에서 보고

2011년

- 5월 (3월) 『기록집3』 공개 (인쇄물500부, 홈페이지 등)
- 9월 (7월) 『기록집4』 공개 (인쇄물500부, 홈페이지 등), 일본사회교육학회 제58회 대회에서 보고 (와타나베)
- 10월 이문화 커뮤니케이션 학회 제26회년차 대회에서 보고 (후지타 라운드)
- 11월 제5회 다문화 사회실천 연구·전국 포럼연구 발표 세션에서 보고 (다케다)

2012년

- 5월(2011년10월) 『최종보고서』(870부, 홈페이지, CD-ROM등)

*괄호 안은 초기 예정

この研究に関するお問い合わせは：

연구에 관한 문의는：

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京 2-1-1
相模女子大学 10 号館 406 研究室 渡辺幸倫

watanabe-y@star.sagami-wu.ac.jp

プロジェクトのホームページ：

http://www.sagami-wu.ac.jp/guideline/kenkyu/research/new_comer/top.html

(プロジェクト終了とともにページのアドレスが変更になりました)

発行日：2012 年 5 月

無断転載を禁止します